

平成19年度

**奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集**

平成20年3月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学年・学級経営の部

- | | | | |
|---|--|--------|---|
| 1 | 子どもどうしが協働しながら追究する姿を目指して
桜井市立纏向小学校 | 清川 米美 | 1 |
| 2 | 「気づき・考え・行動できる」児童の育成を目指して
生駒市立生駒東小学校 | 中谷 篤 | 3 |
| 3 | 願いを聴き、願いを共有する学級経営
平群町立平群南小学校 | 中島 佳代子 | 5 |
| 4 | 学級全員が同じ目標に向かって
十津川村立平谷小学校 | 向峯 好美 | 7 |

教科教育の部

- | | | | |
|---|-----------------------------------|--------|----|
| 5 | 音楽科授業における金管バンド活動について
橿原市立耳成小学校 | 吉田 美代子 | 9 |
| 6 | 社会科学習の指導について
御所市立御所小学校 | 松田 佳之 | 11 |
| 7 | 体育科の指導法の研究について
平群町立平群北小学校 | 田畑 吉一 | 13 |

道徳教育の部

- | | | | |
|---|---|-------|----|
| 8 | 自分たちの郷土「斑鳩」を愛し、よりよくしようとする心を育てる
斑鳩町立斑鳩小学校 | 片倉 裕子 | 15 |
|---|---|-------|----|

国際理解教育の部

- | | | | |
|---|-------------------------------|-------|----|
| 9 | 人権教育としての国際理解教育
奈良市立あやめ池小学校 | 葛和 正則 | 17 |
|---|-------------------------------|-------|----|

特別支援教育の部

- | | | | |
|----|---|-------|----|
| 10 | 個々のニーズに対応した個別支援、学校・保護者支援について
生駒市立生駒小学校 | 森山 貴司 | 19 |
| 11 | コーディネーターとしての取組
大和郡山市立片桐小学校 | 白井 宏幸 | 21 |
| 12 | 校内支援体制の確立と個別の指導計画の作成に向けて
天理市立二階堂小学校 | 吉岡 昌則 | 23 |
| 13 | 興味関心を手がかりに
大淀町立大淀緑ヶ丘小学校 | 宮井 康志 | 25 |

【中学校】

学校教育目標の具体化の部

- | | | | |
|----|---|-------|----|
| 14 | 郷土を愛する生徒の育成<たばこの吸い殻広い活動を通して>
斑鳩町立斑鳩中学校 | 滝澤 治生 | 27 |
| 15 | 学校教育目標を具現化するための取組について
大淀町立大淀中学校 | 前 貴資男 | 29 |

学年・学級経営の部

- | | | | |
|----|------------------------------|-------|----|
| 16 | 大規模校における教務として
大和高田市立片塩中学校 | 和田 悟 | 31 |
| 17 | 「朝の読書タイム」について
平群町立平群中学校 | 奥野 和彦 | 33 |

教科教育の部

- | | | | |
|----|--------------------------------------|------|----|
| 18 | 自然への興味・関心を高めるための体験的な学習
明日香村立聖徳中学校 | 城 律男 | 35 |
|----|--------------------------------------|------|----|

環境教育の部

- | | | | |
|----|---|-------|----|
| 19 | 歴史的景観と自然環境の保全・保護・維持を中心においた環境教育について
橿原市立畝傍中学校 | 松本 清二 | 37 |
|----|---|-------|----|

部活動の部

- | | | | |
|----|------------------------|-------|----|
| 20 | 生徒と共に部活動を
香芝市立香芝中学校 | 若林 伸也 | 39 |
|----|------------------------|-------|----|

【高等学校】

学校教育目標の具体化の部

- 21 生徒が生き生きと活動できる学校づくりを目指して
奈良県立登美ヶ丘高等学校 植杉 嘉津代 41
- 22 教育課程の編成とマネジメント
奈良県立二階堂高等学校 池住 寿弘 43
- 23 「わかる」授業、「できる」授業を目指して
奈良県立大和広陵高等学校 大野 勝稔 45

教科教育の部

- 24 各種技能検定取得への取組
奈良県立奈良工業高等学校
機械技能検定指導者グループ 47
- 25 生徒が、興味・関心をもって土木を学ぶ教育活動の実践について
奈良県立吉野高等学校
土木工学科・教員グループ 49

生徒指導の部

- 26 温かみのある生徒指導を目指して
奈良県立法隆寺国際高等学校 石井 正幸 51
- 27 児童・生徒の理解と指導 ～「交流分析」の活用を通して～
奈良県立香芝高等学校 東 宏樹 53

特別支援教育の部

- 28 教材市場「にかいどう」について
奈良県立二階堂養護学校
教材市場「にかいどう」実行委員会 55

部活動の部

- 29 部員数の多い弓道部における初心者の指導について
奈良県立奈良北高等学校 井戸上 博一 57

その他の部

- 30 自ら考え自ら行動できる生徒の成長を願って
奈良県立桜井高等学校 村田 真一 59
- 31 開かれた学校づくりと情報発信
奈良県立王寺工業高等学校 小森 育雄 61

1 実践内容

(1) はじめに

クラス替えはあったが、昨年（5年）からこの学年の子どもたちと共に歩んできた。人なつっこく個性豊かな子どもたちである。担任として、“優しさ+厳しさ=愛情”という姿勢で日々向き合っているが、子どもたちは落ちついて考える・集中力を持続させる・話し合う・聞き合うといったことが十分ではなく、そのことが学習面・生活面の両方に影響を及ぼしている。そして、一人一人とじっくり向き合っていくと、自信なげで臆病な面が見えてくる。担任に「 さんが・・・しました。」と訴えておきながら、友達を平気で傷つけている場面に出くわすこともある。他者の気持ちを考え、受けとめることができないのである。それは自分が認められている・受け入れられているという実感を味わっていないところからくるのであろう。このような子どもたちの心を解き放つために、本校の研究主題である“表現力”を大切にしながら取り組んできた。



(2) 一人一人の違いを認め合い、自分らしさが発揮できる学級集団を構築するために

まず担任が子どもたちをまるごと受け止めることから始まる。

学級目標は、“つながり合ってハッピー！”

学級開きの後、「おもいっきり自分のPRをしよう。」と呼びかけた。今までなら、好きな教科は？好きな食べ物は？と書く内容を指定するのだが、今回は内容も形式も全て子どもたちに任せた。悩んでいる子には少しアドバイスをしたが、自分の名前に込められた願いや小さい頃のエピソード等、一生懸命考えながら紙面を埋めていった。できあがった自己PRは、“さあいくでえ！6年1組”と称して、学級通信「ビリーブ」で紹介したところ、「子どもたちの個性がしっかり表れていますね。」「楽しんで読んでいます。うちの子はどんな風にも書いてあるのかとドキドキしながら待っています。」と、家の人からの声も聞くことができた。

昨年は、担任が先頭に立って突っ走ってきた感があるが、今年は子どもたちの自主性を大いに尊重し、担任は一步下がって見守り、サポートする姿勢を貫きたいと思った。「なたでここ集会」に向けて、子どもたちから「話し合いをさせて下さい。」と声上がり、（発表の内容を決める 学級のテーマソングを作る 振り付けをする 練習をする）という過程を子どもたちが中心になってやり遂げることができた。そして、集会当日は6年1組の授業風景も織りまぜての発表。緊張感と達成感を味わった子どもたちの顔は輝いていた。

学級通信や家庭訪問、学級懇談等で子どもたちの姿を伝え合うことを大切にできた。子どもたちのいろいろな側面を語り合うことで、学校と家庭の垣根が取れていくことを実感することができた。また、綴り方（学級通信掲載）をみんなで読み合うことによって、友達理解が深まり、学級集団にまとまりができてきた。保護者

からの意見も通信で紹介することで、より繋がりができてきた。

(3) 基礎・基本の定着を図り、伝え合う力を養うために

どの教科においても教材・教具の工夫、多様な意見が引き出せる発問を心がけ、じっくり考える営みを大切にしてきた。特に算数科では式と答えだけでなく、どんな考え方や方法で解いたのかを説明することに時間をかけてきた。一つの問題をみんなで考える中でいろいろな考え方を知り、もっと他の考え方はないかなと、算数科に対する意欲も高まってきた。また、友達に分かってもらえた喜びと同時に、みんなに分かってもらうことの難しさも実感したようである。

宿題や業前のすくすくタイムで、漢字や計算の反復練習を続けた。10問テストによって練習の成果を確かめ、まちがい直しも徹底させた。学級通信でまちがいやすい漢字を紹介することによって、「とめ・はね・はらい」を意識して書く子が多くなってきた。

国語科においては、重点教材を設定し、生活を通して教材を読み、話し合う授業を大切にしている。6年は「さかえ荘物語」(丘 修三著)に取り組んだ。「障害」のあるタチバナさんを見下し、排除しようとするさかえ荘の人々の気持ちを考える中で、学級集団の問題についても掘り下げて考えることができた。

(4) 研究主題のもと、国語科を中心に学力保障に取り組む

研究主任として、全職員で子どもたちに関わるという視点を大切にし、子どもの話題でいっぱいの職員室作りに努めてきた。

生活を重ねる授業を更に深め、広めていくために、模擬授業形式の研修をもった。教材解釈や課題設定、ノート作りでの子どもたちへの支援、授業の進め方を中心に話し合うことができた。

全学級が授業を公開した。研究協議では、子どもたちの姿や発言、つぶやきをもとにして話し合いを深めることができた。

2 成果及び課題

忘れ物や宿題忘れの原因、今後のあり方を子どもたちに考えさせていくことで、学習規律が身に付き、何事にも責任を持ってやり遂げられるようになってきた。また、業前の学習や宿題に意欲的に取り組み、学年当初に比べると漢字力・計算力も少しずつ高まってきた。国語科の重点教材においては、友達の意見に繋がろうとする姿勢が見られ、“対話のある授業”へと高まってきている。しかし、自分の考えをみんなの前でなかなか言えない子もいる。友達の意見の途中でつい口をはさんでしまう子もいるが、「聴く」ことを意識させ、語る授業を地道に続けていくことで、友達から力をもらい、語り切ることができると信じている。今子どもたちは、「まきむく祭り」に向けて着々と準備を進めている。6年1組の出し物は「お化け屋敷」。パワー全開6年1組。どんなお化け屋敷を作り上げてくれるのが楽しみである。

1 実践内容

(1) はじめに

小学校における清掃活動というと、あらかじめ掃除区分が四月当初に学級ごとに分担され、それに基づいて児童を割り振りして清掃に当たらせることが多い。

しかし、これでは、あらかじめ決められた清掃内容をこなす当番活動になってしまい、児童が「気づき・考え・行動できる」余地は少ないように思う。もちろん、清掃活動であるからには、割り当てられた場所をきれいにする当番活動の部分も大切にしなければならない。

そこで、私は、配当場所以外の清掃活動も行えるグループ（「スペシャル掃除隊」）をひとつ増やすことで、児童の「気づき・考え・行動できる」活動が取り入れられるのではないかと考えた。

(2) 具体的実践

昨年度を例にとると、私が担任した6年1組は、自教室や1年1組教室・家庭科室・階段・廊下・トイレなど7箇所が割り当てられていた。通常であれば、児童を7グループに分け一箇所ずつ割り当てれば事は足りるのだが、あえて「スペシャル掃除隊」なるグループを加えた8グループ編成とした。

掃除当番は1週間で交代とし、全員が8週間に1週は「スペシャル掃除隊」がまわってくるように考えた。

児童たちには、4月当初の掃除グループを決める学級会で、

- ・「スペシャル掃除隊」は、担任の私も加わること（「スペシャル掃除隊」以外の掃除範囲の指導は、掃除時間の始めか終わりに巡回し行う。また、各グループごとに掃除時間終了後に反省の時間を設けチェックする。）
- ・通常の掃除活動ではやり残してしまったり、きれいになりにくい「手洗い場」や「廊下の窓」といった場所や、（最高学年としての自覚を持って）どこのクラスの配当でもない場所の掃除も担当すること
- ・みんなの「気づき」を大切にし、みんなの意見も取り入れて活動すること

を説明して活動を始めた。

初めのうちは、

「今日はここの掃除をやる。」



土手の草引き

と担任の私の方から掃除場所や内容を指示していたが、だんだんと児童の方からも、「先生。今朝見たら校門の近くの溝にいっぱい落ち葉たまってたよ。」
「学年園の畑、草だらけだよ。抜いたほうがいいのちがう。」
「廊下、雨の湿気でベチャベチャで滑りやすいな。」
「雨が降って運動場が水溜りだらけで遊べないのだけれど・・・」



学校周りのみぞ掃除

と言った声が上がってくるようになった。

それにともない、「スペシャル掃除隊」の活動内容も「ぞうきんがけ」・「窓拭き」・「落ち葉拾い」・「草抜き」・「運動場の土入れ」と多岐にわたるようになる。しかし、大多数の児童たちは、「スペシャル掃除隊」が回ってくる週を楽しみにしていて、根気強く取り組まないといけない花壇の草抜きでも、運動場の土入れといった力仕事でもいやがらず、意欲的に取り組めるようになっていった。

中には、掃除時間が終わって昼休みになっても、「先生、あと少しで終わりやから、もう少しがんばるわ。」と、もくもくと草抜きを続けてくれる児童が現れるほどであった。

2 成果及び課題

今回の取組は、自分たちの「気づき」や「考え」が生かされていることが、児童一人一人の意欲につながり、様々な活動につながっていったのだと感じている。

また、自分たちの「気づき」・「考え」が生かされることで、清掃範囲や学校環境に関心を持つだけでなく、

「先生、　　さん、給食当番と委員会活動が重なって大変やから手伝ってあげるわ。」

「　　君しんどそうやから、(荷物を持って)一緒に帰ってあげるわ。」

といったように、まわりの友だちにも気を配ることができる児童が増えていった。今回の実践が、友だちの気持ちや困り感にも寄り添える児童の育成につながったのだと考えている。

今後の課題としては、「スペシャル掃除隊」以外の掃除分担場所や学習場面・生活場面でも、子どもたちの「気づき」・「考え」が生かされ、行動に移せるような取り組みを工夫していくことが必要だと考えている。

3 その他参考となる事項

生駒市立生駒東小学校

ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/higasi-e/>

e-mail higasi-e@ed.city.ikoma.nara.jp

1 実践内容

(1) はじめに

『ひとりひとりの子どもの思いを大切に、お互いを認め合い、安心して自分が出せるクラス作り』を目指しているが、それには、子どもと教師の信頼関係はもちろんのこと、保護者との連携が不可欠である。

子どもたちが、毎日意欲をもっていきいきと活動できるよう、保護者とともを考え、協力を得ながら学級経営をすすめてきた。

子ども同士のつながりを深める

- ・心がつながるふれあいゲームや歌
- ・人権意識を高める絵本の読み聞かせ
- ・友だち思いの行動や言葉の紹介
- ・欠席している子どもへの手紙

教師

- ・子どもの声を大切に思いを共感する
- ・ひとりひとりが活躍する場をつくる
- ・日記帳等に心に響くコメントを工夫
- ・授業以外での話しかけを大切にする

保護者と子どもをつなぐ

- ・保護者の学校への要望や悩みなど、思いをきちんと受け止める
- ・家庭訪問等で、保護者の声を直接聞く
- ・連絡帳や学級通信で、子どもたちの様子を具体的に伝える
- ・保護者の思いも子どもたちに伝え、子どもたちとも話し合う

(2) 具体的な取り組み

「いのち」の学習

養護教諭との連携で、お母さん体験をし、保護者の気持ちを考えるとともに、日曜参観で自分が生まれるときの保護者の思いを直接聞く機会をもった。



「いのち」の学習

【保護者より】

- ・早く生まれすぎて、とても心配した。
- ・家でも、お腹にいた時、超音源で撮った写真を見せ、みんなから愛されて生まれてきた事、喜びを伝えました。
- ・最近いじめや自殺といった事件が多い中、命の大切さをあらためて学習できたこと、うれしく思います。

【子どもの声】

- ・おもりをつけてみると、足もとが見えませんでした。すわるの、立つのに、ひとくろうでした。
- ・赤ちゃん体けん、すごくおもかった。お母さんにかんしゃしています。赤ちゃんをだいたら、お母さんにだかれたことが、思いうかんできました。

ゲストティーチャーをむかえて

～フラフープ名人になろう～・～フィリピンのおやつを作ろう！～

子どもの保護者から、フラフープの回し方を教わった。また、フィリピンの話を聞いた。



たり、フィリピンのバナナ（サバ）を使った「バナナトロン」やさつまいもとココナツミルクで作る「ギナタアン」などのおやつ作り方を教えてもらい楽しいひとときをすごした。



おやつ作り

【子どもの声】

- ・フラフープのプロやなあ。せかいーや！
- ・フラフープが竹で作れるなんてすごい！ しかも手作りで、自分の好きなサイズにできるなんて。
- ・教えてもらって、はじめてできました。ありがとうございました。またこんどもれんしゅうします。
- ・バナナトロン、外はパリパリ中はとろとろでおいしい。
- ・ココナツミルクとってもいいにおいでした。

キムチ作り ~ アンニョン、キムチ！ アンニョン Y さん！ ~

4年生といっしょに在日の Y さんから、本格的なキムチの作り方を教えてもらった。できあがった手作りキムチに、「スーパーデンジャラス・ちょうげきからキムチ」など、自分たちでネーミングしたラベルをはって、家の人にプレゼントをした。

【保護者より】

- ・自分たちで作っただけあって、からいキムチでしたが、パクパク食べていました。まさに、食育ですね。
- ・学校から帰って、J と兄と三人ですぐ頂きました。辛くてとびあがりそうになり、その後、大笑いして、楽しい時間がもてました。
- ・体がホカホカあったかくなりました。
- ・家族みんなで頂きました。

【子どもの声】

- ・もって帰る前、お母さんが「キムチ、からーいの楽しみにしてるよ。」と言ってたよ。食べたときは、水をいっぱい飲んでいただけ、おいしかったです。
- ・Y さん、キムチのウルトラバーニングの作り方を教えてくれてありがとう。みんな「からいけどおいしい」と言ってました。ぼくもおいしすぎました。

2 成果及び課題

- ・教師と個々の保護者が、「子どものよりよい成長」という共通の視点を持つことは、学級の子ども全員のよりよい成長につながるという考えのもとに、これからも子どもや保護者の思いを大切に、共にみんなで磨きあっていきたいと考えている。
- ・今年度から学校で取り組んでいる「心ぼかぼかプラン」をより一層具体化し、保護者や地域にも波及させていきたい。

3 その他参考となる事項

ゲストティーチャーをむかえて その他の取組

「昔のあそびをしよう！」

子どもたちの祖父母や地域の方より、昔のお話を聞いたり、あそびを教えてもらう。

韓国の話を聞こう ~ ようこそ T さん ~

韓国人留学生の方より、韓国の子どもたちのあそびや学校の話を見せてもらう。

「心ぼかぼかプラン」 いじめをなくす合唱集会などの取り組み

1 実践内容

(1) はじめに

私が学生の時に受けた教育実習後のまとめのページに確かこのような事を書いた記憶がある。「へき地の学校の子どもたちと勉強したい。学力よりも学級指導に重きをおきたい。」と。学力も大事であるが、人間教育を通して、学力もつけていければという思いを抱いていたのかもしれない。



(2) 概要

年度当初、担当学年が決まると、「どんな学級かな、どんな子どもがいるのかな。」と、いつもわくわくしながら学級に入る。一人一人と接することがとても待ち遠しくて、接してみて十人十色だということを再確認すると、やる気が更に出てくる。

そして、いよいよ私の学級作りが始まる。しかし、何を行うにしても、まずは学級が、私を含めて一つにならなくては前に進まない。そのために必要なことは、常に学級全員が同じ目標に向かって取り組むことではないだろうかと考えた。

学級目標を決める。

まず、自分たちの学級の良くない点を出させ、次に、反省を踏まえてどんな学級にしたいのか十分話し合わせ学級目標を決める。高学年になるにしたがって、自分たちの良くないことが把握できているので、それをカバーできるような目標を考えさせる。しかし、いつもその根底には優しさを忘れないように指導している。

常に同じ目標に向かって取り組む。

一年間にいくつかの目標を掲げ、一つクリアすれば次の目標を掲げ、常に何かの目標に全員で取り組ませている。

4年生以上(3年生は2学期から)は全員商工会の珠算検定を受検する。珠算検定は年に4回あり、すべて挑戦させている。目指す級はちがっても同じ時間に同じ事に取り組んでいるので、競争心だけでなく、教え合うという優しさの面も見られる。また、結果を聞いて、一緒に喜んだり悲しんだりすることができる。

学校の大きな行事には、目標を決めて全員で取り組ませる。6年生を送る会、1年生を迎える会など、高学年になるほどそれぞれに役を持たせ、全員で行事に取り組ませる。行事をやり終えた達成感を全員で味わう事ができる。

挨拶を大きな声で言う。

相手(特に教職員)から挨拶をされる前に自分から先にするように声かけをしている。これはかなり時間がかかるので長期戦で臨んでいる。

健康チェックを続ける。

洗顔・歯磨き・朝食・朝の排便・爪・ハンカチの携帯を係に調べさせている。特

にハンカチの携帯は、大人になってもマナーの一つなので、習慣化させたい。

やらなければならないことは必ずやり終える。

宿題は、病気や家の都合でできなかった時は、約束はぜったいに守ろうという意味で、必ずその日にやり終えて提出させている。

間違ってもいいから発表する。

授業中には、「教室では間違った答えを言ってもいいんだよ。」と促し、自分の意見をどんどん発表させるようにしている。そして、間違った時にはその子どもの意見のおかげでみんなが考える場を作ってくれたのだからと、子どもの発表をほめてあげる。

なるべく早く解決する。

子どもたち同士のけんかは、なるべく早く、その場で解決させる。当人だけでなく、周りの子どもたちの話にも耳を傾け、わだかまりがないように指導している。また、帰りの会の時間がある時には、必ず、一日で良かったことと、悔しかったり悲しかったりしたことを発表させている。いじめにつながるような事が起こっていた場合は、早期発見ということで解決の糸口が見つかりやすい。

手伝いをさせる。

週末の宿題は、家の手伝いをしてその様子を日記に書かせている。まだまだちょっとした手伝いで‘仕事’とまではいかないが、学級通信で友だちの手伝い日記を読み、いろいろな仕事に興味をもち、たまには親と一緒に汗をかく‘仕事’ができればと願っている。

私が進んで保護者との関わりをもつ。

子どもを知る上で保護者との関わりは重要である。少しでも気になることがあれば、すぐにコンタクトをとり、真剣に話を聞ける態勢で臨むようにしている。また、なるべくPTA行事には参加して保護者と冗談が言えるような関係にまでなりたいと思っている。

2 成果及び課題

子どもたちが心を開いてくれるようになるにはかなり時間がかかるが、あせらず取り組んでいくと、担任を信頼してくれるようになる。また、わけへだてなく子どもたちに接していくと、いつしか、周りにはいろいろな個性の子どもたちが集まってきている。そうなると、学級全体での話し合いができるようになり、相手に対する優しさが少しずつではあるが見られてくる。この優しさ、つまり思いやりのある子どもになってほしいと願い取り組んできた。2学期には、珠算検定において全員合格という目標を達成して、喜びを確かめ合い自信もつき、次の目標へと取り組みだしている。

しかし、私の体力と若さにも限界があり、子どもたちにとって大切な遊びが疎遠となるため、違う何かでカバーしなければと思うこの頃である。

1 実践内容

はじめに

(1) 音楽科授業に金管楽器を取り入れることについての基本的な考え方

金管楽器は、音楽を楽しむための「音」が出るようになるまで少し時間がかかるが、他の旋律楽器と同じように普通の音楽科授業の中でも充分指導できる楽器であると捉える。

小学校における金管楽器の学習は、鍵盤ハーモニカやリコーダーと同じように基礎的な奏法や取り扱いに慣れ、合奏を楽しむ初歩的な段階であり、生涯学習の出発点である。

(2) 「木管楽器」ではなく「金管楽器」を取り入れる理由

いくつかの種類があっても奏法は同じなので指導しやすく、児童にとっては自分にあった楽器を自由に選ぶことができる。

表現力豊かな楽器であり、合奏するとダイナミックで豊かなハーモニーに浸ることができる。

取組の概要

この学習が成立するためには、二つの条件が必要である。それは、「楽器の確保」と「時間の確保」である。

まず、楽器については、打楽器を担当する児童もいるので、1本の楽器を3学級で共有すれば、1学級の児童数分約30本の楽器と2学級の児童数分のマウスピース約60個を準備できればよい。8年前、本校には金管楽器が7本しかなかったもので、県内の6校にお願いして約80本の金管楽器を借り集めて取組を始めたが、喜んで学級バンド活動に取り組み児童の様子を見て、学校予算のほかPTAも楽器購入に協力してくれることになった。それで毎年2~4本の金管楽器とマウスピースを数十個ずつ購入できるようになったので、今では、故障したときに使う予備も入れて、借用楽器は約10本である。

児童が授業で初めて金管楽器に出会うのは、「木管楽器と金管楽器」を知る3・4年生の学習である。木管楽器は本校にはないので、ビデオを視聴して学習するが、金管楽器の場合は、間近でトランペット、アルトホルン、トロンボーン、ユーフォonium、チューバを見せる。奏法として、音を出すにはマウスピースを使うこと、ピストンやスライドを動かして音を変えること、楽器が大きいほど低い音が出ることなどを、実際にこちらが吹いて紹介する。低学年からあこがれていた金管楽器が、授業でより身近になる瞬間である。

5年生の3学期になると、いよいよ金管楽器の基礎学習を始める。内容としては、姿勢、腹式呼吸、太いストローのような息の出し方、そして何よりも大切なアンブシャー（金管楽器を吹くための特別な口の形）を学習する。はじめは図工室の鏡を借りて行う。次に、バズィング（ブーという音を唇で鳴らすこと）ができればプラスチックのマウスピースでいろいろな音の出し方（サイレン、空襲警報、ピンポンなど）を遊びながら練習する。これらは毎時間のはじめに10分ぐらいを使うだけだが、しばらく続けてい



るとマウスピースだけで簡単な童唄や CM ソングをふける児童が増えてくる。その後、トランペットを 2 人に 1 本ずつ渡し、リコーダーの初歩指導と同じようにド～ソまでの音を使って簡単な曲を吹きながらトランペットに慣れるようにする。このように 5 年生の 3 学期から取組を始めることで、6 年生になり少しでも早く学級バンド活動ができるのである。

6 年生の 4 月からは、5 種類の金管楽器をすべて吹いてみて、自分に合った楽器を選び 5 月からいよいよ学級バンドとして、ロングトーンや倍音・音階・ハーモニーの基本練習をしながら金管合奏を仕上げていくのである。ここで問題になるのは、先前提条件の二つ目である「時間の確保」である。これは、総合的な学習の時間から 20 時間を充てることで、週 2 時間の学習が確保できる。さらに、6 年生の学習内容を 5 年生の内容に結びつけて先取り学習するようにし、6 年生で金管バンド活動の時間を生み出す工夫をしている。1 学期は「ちょうちょう」や「きらきら星」の簡単な金管合奏から始まり、6 月には 6 年生の教科書にのっている「こげよマイケル」、7 月には「ラバースコンチェルト」に挑戦する。2 学期は、おうちの方々に感謝の意味を込めて、おうちの人からのリクエスト曲をもとに 11 月の『日曜参観』と『檀原・高市子ども音楽会』で学級ごとに発表する。3 学期は 1 月末の『奈良県小学校金管フェスティバル』に向けて、学級ごとに自分たちの演奏したい曲を学級担任と共に話し合い、まさに学級全員で金管合奏に取り組み、卒業前の大きな思い出を作ることになる。

2 成果及び課題

成果

- (1) 金管合奏を通して男女共に音楽が好きになる児童が増えた。
- (2) 『継続は力なり』を身をもって体験した児童は、努力することを惜しまなくなった。
- (3) 仲間と合わせることに喜びを感じるようになり、信頼関係が深まり、学級の絆が強くなった。
- (4) 金管楽器が吹けるという自信は、子どもを意欲的・行動的にさせる。
- (5) 『卒業生を送る会』などで演奏を聴いた下学年の児童は、「6 年生になれば自分もあんな楽器を吹いてみたい」と、あこがれを持つようになった。
- (6) 保護者の関心も高まり、PTA の中にも金管バンド部が誕生し、月 2 回の活動が続いている。

課題

5・6 年生の 2 年間の年間指導計画を点検し、毎年より良いものにしていくこと。

3 その他参考となる事項

本稿についての詳細は、教育芸術社より出版されている、兵庫教育大学教授竹内俊一氏監修による「小学生バンドの指導と運営のポイント」～学級バンド活動から地域と連携するジュニアバンド活動まで～、の第 2 章に掲載されている。

1 実践内容

初任者として赴任した学校では、社会科を研究テーマとして研修が行われた。人権教育を柱とし、地域の素材を教材化する取組であった。夏休みには、先輩の先生とカメラを持って地域を歩き教材を探した。この経験を生かし、これ以降自身の研修テーマとして位置付け、社会科指導に取り組んできた。



また、御所市社会科副読本「わたしたちの御所市」の編集委員として副読本の編集に関わりながら、地域教材の発掘に取り組んできた。

(1) 地域の素材を教材化する取組

地域教材の発掘には、「この橋はどうだ」「この道はどうだ」と、児童の眼前にある事物や事象に目を向け、教材としての教育的価値を見出す教材研究が必要である。そこで、地域の先人に話を聞き、社会科としての教育的価値を見出す作業を続けた。こうした作業の後、大単元として学習する教材、中単元として学習する教材と区別しながら教材の重点化を行った。地域教材は、学習にあたって教材が身近にあるため、児童が何度も地域を訪れ、社会事象を比較検討したり関連づけたりと、総合的に考えることができた。

6年生の歴史学習で「ごせまち」の学習を取り上げた。校区に江戸時代の町並が残る地域がある。近年見つけた文献で、ごせまちの人々が、伊勢参り（おかげ参り）をする旅人に対してもてなしをしていたことが分かり教材化した。学習後の児童は、毎日通学する町並に歴史があること、日本中から訪れるおかげ参りの旅人をもてなしたことを知り、郷土への誇りと郷土への自信につながったようである。



(2) 「人の営み」が見える社会科学習

ごせまちの学習

教材の中に「人の営み」が見えてこそ、児童は、興味・関心をもって社会的意味を追究することができる。「3年生はき物作り」の学習では、はき物作りに携わる人々からの聞き取りや、はき物作りの疑似体験によって人々の工夫や願いに触れることができた。「シンナーを乾かす時に火事になることが多い」「冬場は、窓を閉めて作業するからシンナーの臭いがきつい」などと、その仕事から起こる問題点についても児童から発表が続いた。そうした声は、4年生の「新しいまちづくり」の学習へと引き継がれた。また、「人の営み」が見えたことにより、「私たちの地域はこの仕事で成り立っている」ことに気付き、それが地域の問題点でもあることを見つけ出すことができた。こうした学習から、働く人への見方が変容した。「人の営み」を通して社会の仕組みを知ることで、具体的なものから抽象的なものを考える橋渡しができた。

みかんを持っている写真は、5年生の公害の学習のまとめとして水俣で栽培されている無農薬のミカンを取り寄せ、劇化して発表しているところである。この学習に取り組んだのは10年以上前のことである。資料の一つとして水俣病患者の一人がベトナムのベト君ドク君に車椅子を贈ったというニュースを取り上げた。そのベトさんが先

頃亡くなった。水俣病患者の願いに触れながらこの学習をした児童のうちの一人でも、ベトさんのニュースを聞き、あのと時の学習を思い起こしてくれただろうか。児童の間で問題意識として生き続けていてほしいと願う。



公害学習の劇発表

(3) 「考える」社会科授業

北俊夫（岐阜大学）教授は、著書の中で社会科学学習の本質は、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるべき」と著述している。

「考える力」は、児童が主体的に問題解決しながら生きていこうとする「生きる力」につながるものである。社会科学学習は児童の「生き方」や人間形成に直結した教科である。知識を与えるのではなく、「考える」力を育成することこそ、未来を生きる児童にとって必要な力である。「新しいまちづくり」の学習では、「どんなまち（地域）をつくりたいか」と問いかけ、校区の地域にある問題点を探した。「はき物作り」の学習を生かし、児童からはいろいろな問題点が出された。地域の道路が狭いことから、「曲がりくねった細い道では消防車は地域へ入ってくるできない。」「救急車だって入ってくるできない。」「道が曲がっていると、火事の時、消防のホースが曲がりにくいそう。だから、火事の時、家の中だってホースを通すことがあったそう。」など、意見を出し合い考えることで様々な問題点をつきとめることができた。

また、「5年生東辻地区の養鶏」の学習では、「東辻地区で養鶏が盛んなのに、川を挟んだ南十三地区はどうして養鶏が盛んにならなかったのだろう。」と疑問が出た。聞き取りをしながら二つの地域の地理的条件を比較検討した結果、「東辻地区は水はけが悪く米作りに適さなかったの、当時盛んになりかけていた養鶏をやりはじめた。」こと、「南十三地区は、米作りに適していたので、水田を養鶏場にかえる必要がなかった。」ことを比較検討し考えることができた。この学習から、人々が地理的条件を克服し、工夫して農業を行っていた事象を学習することができた。

2 成果及び課題

地域教材を活用しながら考える力を育成する学習は、新しい課題が眼前に現れても、類推解釈しながら社会的問題を解決しようとする力となって現れる。ややもすると暗記学習に偏っている社会科では、こうした力は育成されない。社会は日々変化する。エネルギー問題や環境問題に顕著に見られるように、社会的価値も変化する。こうした時代に生きるためにも「考える」力の育成は不可欠である。

今後も、地域教材の発掘を行いながら、「人の営み」の見える教材、「考える」力を育成する学習指導を工夫し、児童が社会的意味を見出す学習の工夫を続けたい。

また、児童の周囲にはたくさんの情報が存在する。児童は、情報過多の時代に情報を処理できないばかりか、情報を鵜呑みにしてしまいがちになる。「正しい情報は何か」を考えることができるように、NIEの実践と合わせて、メディアリテラシーにも視点を当てて取り組んでいるところである。

3 その他参考となる事項

御所小HP gose-sho@m5.kcn.ne.jp

1 実践内容

新採用になってまもない頃は毎日のことをこなすだけで精一杯で、あれもこれもしなければという思いとは逆に、なかなかうまく仕事を進めることができなかった。もちろん教材研究もそうで、すべてをうまくしなければという焦りがますます授業を空回りさせていた。そんなとき先輩の先生に「ひとつの教科をじっくり研究するなかで、少しずつ他の教科のことも、子ども達のことも見えてくるかもしれないよ。」とアドバイスをいただいた。この言葉が、体育科の指導法を研究するきっかけとなった。



子ども達の「ぼくサッカーなるてんねん。おれは野球なるてんねん。」という受け身の言葉にひっかかりを感じていたのもこのころであった。「放課後のサッカーや野球は自分がするものだ」という自発的な感覚を持って欲しいということが私の中にあっただためであろう。現在はどの子どもが「運動を習っている・習っていない」ということが当たり前になり、体力のある子、ない子の二極化が大きな問題となってきている。

私が授業で大事にしていることは「楽しい体育」を学習することで、「運動好きな子を育てる」ことである。「楽しい体育」であるためには、子どもが運動できる時間を保障することが大切である。そこで、準備から片づけまで入れた45分の中で、運動の場を工夫し、しっかりした学習計画を組むことが必要だと考えた。できるようになった喜びと、運動の仕方がわかった喜びを子ども達に少しでも多く経験させることで「運動好きな子」を育てることができると考えた。

はじめに、ボールを巧みに操作し、思い切りボールを蹴り、ゴールしたときの快感を感じる機能的特性を持つサッカー型に取り組むことにした。ゴールした時の快感を味わう機会を増やすために、両サイドにあるゴールを中央に持って行き、そのゴールも円形とした。その結果、どの角度からもシュートすることが可能になり得点する機会は増えた。しかし、攻守交代が入り乱れるところにも特性がある部分を、攻撃・守備と分けることでしか教材としてつくりあげることができなかった。そこで人が動ける範囲を限定するグリッド形式を用いた。しかし、これにも限界がでてきた。敵が少ない分、技能的に不安がある児童も落ちついてボールに触ることができたが、ゲームにスピード感がない。悩みは増すばかりである。そこで、私は積極的に研究会の授業公開や研修に参加するようにし、その中で、「楽しい体育」はゲームからということを知ってもらった。試しのゲームをする中で、クラスみんなが楽しめるルール作りをし、作戦を考え、試してみる（めあて学習ステージ型）という授業計画を立てるようになった。何よりボールゲームの中で重要に思ってきたのが技能の習得であったが、自分達にあったルール作りをすることや作戦を考えることの大切さ、何より友達との関係や学級のよい雰囲気作りをすることが大切であることに気づいていった。

そのとき出会ったのが「体づくり運動」である。いじめられやすい子・コミュニケーションのとりにくい子・様々なストレスを抱えている子にとって、「体づくり運動」はとても重要な意味を持っており、学級のよい雰囲気作りをするのにも適していると考えられるようになった。

「体づくり運動」内容としては

- (1) 体ほぐしの運動（自己の体に気付き、体の調子を整えたり、仲間と交流したりするためのいろいろな手軽な運動や律動的な運動をすること。）
- (2) 体力を高める運動（体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動をすること。力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動をすること。）

が挙げられている。

私は、学年初めの時期に、体育の授業を「体ほぐしの運動」からはじめるようにした。次々に手軽な運動をしていくうちに、運動に対する苦手意識を持っている子も楽しげな顔をのぞかせる。1人でおこなう運動・2人でおこなう運動・グループでクラスみんなでおこなう運動を組み合わせながら進めていく。そのうちに子ども達同士が声をかけあう場面も増えていき、自分の体や友達の体のことにも少しずつ気づいてくる。授業の中に体を接しない運動・体を接する運動をうまく仕組むことも大切である。教室にもどっても今まで会話をすることのなかった子が友達と笑顔で話している場面がみられることはとてもうれしい瞬間である。学級のスタートである。



2 成果及び課題

研究を進める中で、子ども達に自分の思いを押しつけて教えようとする教師から各教科の各単元のポイントは何なのかを考え、どのように授業を進めれば子ども達が内容を理解し、身につけることができるようになるのかを考えられるようになったこと、また、子ども達の笑顔にたくさん出会えたこと、たくさんの先生方とたくさんの授業に出会えたことは私の宝となっている。

しかし、子ども達は一人ひとり違う。それぞれの発達段階と可能性を持っている。子ども達の抱えている課題をできるだけ早く把握し、少しでも改善できるように日々研究を進めていくことが課題である。

「楽しい体育」を通し、『運動好きで、生きる力を持つ子ども』を育てられようこれからもがんばっていきたい。

3 その他参考となる事項

参考資料（上図）体ほぐしの運動！（みんなで楽しもう！やってみよう！）

（制作 奈良県教育委員会・協力 奈良県小学校体育研究会）

1 実践内容

斑鳩町は、聖徳太子ゆかりの地として知られ、法隆寺や藤ノ木古墳、竜田川など、万葉の歴史と自然が調和した文化の薫り高い町である。

ここ斑鳩町で、平成17年度に「子どもたちに豊かな心を育てる教育活動」の取組として小中連携教育「斑鳩部」ができた。私は、研究推進委員として参加し、それ以後、子どもたちに「自分たちの町の歴史や文化に関心を持ち郷土斑鳩を愛し、お世話になった人々に感謝する心」を育てる実践を道德の授業を中心に、体験活動と関連させながら取組を続けている。



学級経営において

週一回の道德の時間を大切に、様々な体験活動と関連させながら、「一日楽しくがんばれたな」「学級の中で自分の存在感があり、居心地がよいな」と思える学級づくりのために、子どもたちとの人間関係づくりに力を注いできた。

日常的には、学級の約束として、あいさつと日直などの当番活動を、きちんと心をこめてするようにしている。子どもたちにまんべんなく声かけをすること、そして、今までより改善できた行動、やさしさや気働きのできた行動などは大いに褒め、それらの行動が学級に広がるように心がけてきた。

このようにして、教師と子ども、保護者と教師、子ども同士の心をつなぎ、集団を創ってきた。日々の積み上げで、自ずと個人一人一人も伸び、少しずつ「なんでも言い合える雰囲気のある学級」が創りあげられてくる。そのことによって、教科指導を始め道德の時間や総合的な学習の時間も生き生きとしてくるのである。このような取組を毎年、斑鳩の子どもたちと新しい出会いを大切にしながら、29年間続けてきた。

道德学習は、学級づくりの「要」の時間

年間授業時数の確保はもちろんのこと、週一回の道德の授業が読み物資料を読むだけの指導に終わったり、道德の価値項目を教え込むことだけにとどまったりしてはいないかと毎回、授業を振り返り、子ども心に響く道德の時間になるように次のことに気を付けている。

- ・ 毎年、年度当初に、道德の年間計画を見直すことで実態にあった資料選びを行う。
- ・ 多様な考えを引き出すことのできる発問や板書の工夫を行い、自分の思いを表現したり考えたりできる場(役割演技等)を十分とった。
- ・ 吹き出しを工夫したワークシートを活用して書く時間を多く取り入れた。
- ・ 道德の時間と総合的な学習の時間やその他の体験活動と関連させ、総合単元的に道德の指導課程を考えた。



道德の授業

町内の小中連携を進める中で

小中連携教育「斑鳩部」の推進委員として携わり、「この斑鳩の地に住む子どもたちに自分の郷土を愛し、その町をよりよくしようとする心を育てるにはどうすればよいか」を本格的に研修し実践することになった。

このように地域でテーマを絞って教育活動を行うことは今までになく、なかでも、郷土を愛する気持ちを感じさせるのは、子どもたちにとってなかなか



米作り体験

難しいものである。だからこそ、意図的に学校の教育活動の中で感じるようにしていかなければならない。その手だてとして、直接地域の人のお話を聞いたり、現地見学などさまざまな体験をしたりする中で、我が町、斑鳩に住む喜びと郷土をよりよくしていこうとする心情を高めることができていった。

地域の方々をゲストティーチャーとして

具体的には、地域の方（4Hクラブ）の協力で「総合的な学習の時間」を活用しての米作り体験から始めた。子どもたちは、自分たちの植えた苗が大きくなるにつれ、自然のすばらしさや育てる喜びを感じることができた。また、肥料まきや田植え・稲刈りなどの作業の中で苦労や努力、お米に対する思いや願いにも心が響いたのは、貴重な経験であった。さらに、その中で、今米づくりができるのは、むかしこの地域は、水害に苦しめられた土地であったが、郷土のために財産と命をかけて川を掘った先人のはたらきとその存在を知ることを通して、郷土を愛する気持ちを育むきっかけとなった。

らんらんフェスタや産業フェスタ

毎年11月に実施する「らんらんフェスタ」（日曜参観）で保護者や地域の方々の前で5年生は、「協力・感動・夢発信」をテーマに発表した。「万物節」（山村暮鳥）の群読やスライドを通して、グループごとに調べた「稲の生長」の一部、コスモスの様子などを発表した。また、今年は創立120周年の式典とも重ね、多くの地域の方々に観ていただき、子どもたちのメッセージとコスモスの種をつけて風船を飛ばした。

2 成果及び課題

道徳の一時間一時間を大切にすることで、友だちの考えや思いを聞いたり、自分の行動を振りかえることができた。また、体験を組み入れることで、子どもたちの道徳的実践の場作りとなった。

地域の人たちとふれ合う機会が多くとれたことで、その人達の生き方にふれ、思いに共感しながら、自分たちの住む斑鳩のすばらしさを感じてくれたように思う。

今後も、子どもたちに豊かな心を育むために、道徳の時間を要として体験をどのように関連付けて実践力の育成につなげるか、どのような教育活動を仕組んでいくか、学級だけにとらわれず、開かれた学級、学校を目指し、積極的に斑鳩の文化を取り入れ、地域の方々の協力を得ながら、子どもたちと向き合っていきたい。

3 その他参考となる事項

斑鳩小学校ホームページ（URL） <http://ikaruga.kir.jp>

1 実践内容

国際理解教育を実践していくにあたり、大切にしたいと考えた3つの柱がある。1つめは、「異文化との出会い」である。生活に直接結びついた衣食住など、子ども達にとって豊かで楽しい出会いを創造していくこと。2つめは、「自国理解」。外国の文化や生活様式などを学ぶことで、日本の伝統や文化、歴史をより深く考えようとする態度を育てること。最後に、「異文化理解」。『ちがいがい』について正しく認識する力を養うこと。異なる生活習慣や文化は、それぞれに尊重されるべきものであって、どちらかが優れていたり、豊かであったりとするものではない。つまり、国際理解教育の本質は、自分と異なる考えや価値観に出会い、自分を見つめ直し、そして、互いを尊重しあう態度を育てる人権教育に他ならないと考えなければならないと言える。



(1) 「異文化との出会い」

メキシコってどんな国

2003年度から2005年度までの3年間、メキシコ合衆国にある日本人学校で勤務した経験を活かして教材作りを行った。

・(社会科)「日本の米作りとメキシコの米作り」

私たちの生活に身近なお米。北アメリカ大陸にあるメキシコ合衆国においても米作りは行われている。しかし、米の種類や育て方など異なる点が多い。メキシコシティに隣接するモレロス州で現在も農業を営む在墨日本人の方のお話と日本人学校の子ども達が農業体験した際の写真資料を提示して学習を進めた。

この学習を通して、外国は日本と異なる文化や生活習慣を持っているというだけでなく、日本と似ている点やそこで暮らす日本人の生活や思いにも気づくことができるように学習を進めた。

・(総合的な学習の時間)「メキシコってどんな国」

メキシコ合衆国について以下のような内容で子ども達に授業を行った。子ども達はその内容をもとにして、メキシコについて自分なりにまとめていく活動を行った。

はじめに・海外で暮らす日本人や日本で暮らす外国人などの統計データを示した。国際理解教育で何を学んでいこうとするのか、子ども達への問題提起を行った。

メキシコの国土・位置、面積、人口、言葉、気候。特にスペイン語については、とても興味を持って子ども達は聞いていた。

メキシコの世界遺産・ほとんどの子ども達にとってメキシコは、初めて意識をする国であった。先進国＝豊かな国という感覚を持っている子どもも少なくないことから、美しい自然遺産や歴史や伝統のある世界遺産を紹介し、経済的な豊かさだけではなくすばらしさを感じさせたいと考えた。



メキシコの産業、歴史・小学生の子ども達には、少し難しい内容であったように感じられた。今後、改善していく必要があると考える。

メキシコの生活・メキシコ人が実際にどのような生活を送っているのかをまとめた。料理やスポーツ、音楽。そして、メキシコの子ども達がどんな遊びやテレビを好んでいるのか、メキシコの学校生活はどのようなものなのかなど、子ども達は興味を持って聞くことができた。歴史や宗教などにより異なる生活スタイルや考え方があることを子ども達なりに捉えることができた。

日本とのつながり・外国のことを学ぶにあたり、日本とどのような関係があるかという視点をもつことは重要なことである。メキシコに移民した日本人の話、現在、メキシコで暮らす日系人の方や日系企業の様子、日本人学校の子ども達の学校生活などについてがその内容である。また、あわせてこの時にメキシコ人から見た日本の印象についても触れておいた。

これらの活動以外にも、実際に外国の方と接することができる場として、トルコ共和国の方々との交流会を持つこともできた。

(2) 「自国理解」

国際理解教育において、外国のことを学ぶときに、日本との関連を考えながらその国のことを理解することが大切であることは先にも述べた。そのためには、日本のこと、私たちの郷土のことについて学ぶことも併せて行うことが必要であると考えている。奈良県には、歴史的・文化的に価値ある建造物や遺跡が数多くある。この利点を活かし、『奈良市の世界遺産巡り』『飛鳥への社会見学』を学習の中に位置づけた。

(3) 「異文化理解」

総合的な学習の時間の大きな取組として、子ども達は、自分が興味を持った国について学習を進めていった。このとき、情報を適切に手に入れることや、調べたことをわかりやすい方法でまとめ伝えることも、子ども達に意識させるようにした。



2 成果及び課題

子ども達は、外国を日本と関連づけて考えることができるようになってきた。そのことで、単に外国のことを調べるだけでなく、外国の人に日本のことを伝えたとしたら、どうすればよいかという視点を持つこともできた。

また、国際理解教育を進めていく上で、英語活動の果たす役割についても、今後ますます考えていく必要があると感じている。本校でも、英語活動が今年で3年目を迎えている。特に本年度は奈良市が推進している「小学校ハローイングリッシュ事業」に則り、その活動を進めている。英語活動が単なる言語習得ではなく、コミュニケーション能力の育成や異文化理解の時間となるように、学習内容や指導計画を更に研修していきたい。

3 その他参考となる事項

「ビバ・メヒコ21」(日本メキシコ学院日本コース 現地理解学習教材・資料)
奈良市立あやめ池小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/ayameike-e/index.htm>

個々のニーズに対応した個別支援、学校・保護者支援について

生駒市立生駒小学校 教諭 森山 貴司

1 実践内容

(1) はじめに

今年度からは特別支援教育が始まり、新たなスタートとなった。通級指導教室においては、昨年から通級による指導対象にLD・ADHD・高機能自閉症等の発達障害が加わり、新たな制度でLD等も含めた通級指導が各地で始まりつつある。通級指導教室に通う子どもたちは、構音障害やことばの遅れ等を主訴としているが、LD等の発達障害を併せ持つケースも多い。そのため、県内の通級指導教室では個々の特性に応じた指導を行ってきており、これまで指導を積み上げられてきた。



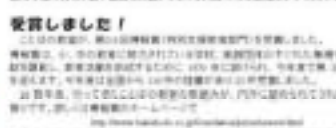
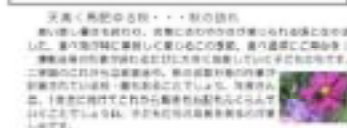
(2) 取組の概要

生駒小学校の通級指導教室は、併設された幼児対象のことばの教室と連携して幼児から小学生までを支援しているのが特徴である。発達に遅れのある子どもたちに対しては、早期からの対応が有効とされており、この点では教室は大きな役割を担っていると考える。本教室で指導を受ける幼児や児童は、年々増加の一途をたどっている。また、幼児・児童の障害の状態は、ことばの遅れや構音障害のみならず、LDやADHD・高機能自閉症・アスペルガー障害等を併発している子どもたちが増加してきている。幼児、児童が特性に応じた力をつけていくために、個別やクラスでの支援を多角的に研究した。

効果的な発達障害児への支援と指導・相談の研究

学習で影響が出てくる読み書き障害について、そのアセスメントと指導方法や支援のあり方を研究した。アセスメントはK-ABCとWISC- を実施して、その子の特性を知ることによってエビデンスに基づいた学習への援助を行った。特に入門期

の読み書きを学校・家庭・通級の連携しながら、成果が出ない子どもへの支援を行った。保護者の相談は、子どもの発達の心配、家庭での関わりことばかけ、友だち関係等を、また、担任の先生へは学習の仕方、行動面での心配、悩みを中心に据えて相談を行った。また保護者へは広がりつつある発達障害に関して正しい認識と対応の方法を知ってもらうために、教室通信の発行やミニ講座を開催した。



1月の予定

日	月	火	水	木	金	土
1						
2	授業の日					
3	授業の日					
4	授業の日					
5	授業の日					
6	授業の日					
7	授業の日					
8	授業の日					
9	授業の日					
10	授業の日					
11	授業の日					
12	授業の日					
13	授業の日					
14	授業の日					
15	授業の日					
16	授業の日					
17	授業の日					
18	授業の日					
19	授業の日					
20	授業の日					
21	授業の日					
22	授業の日					
23	授業の日					
24	授業の日					
25	授業の日					
26	授業の日					
27	授業の日					
28	授業の日					
29	授業の日					
30	授業の日					
31	授業の日					

学校・保護者との連携のあり方

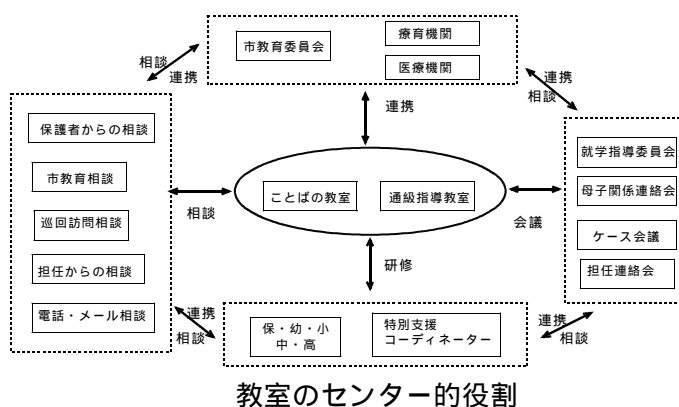
学校・園との連携では、5年前から年度当初に担任との連絡会を設けて、全ての校・園の担任と個別の懇談をして、指導・相談中の子どもの特性や配慮、保護者の思い、エビデンスに基づいた支援方法等を情報交換してきた。同時に各校・園の理

解を得て実現できた巡回訪問相談も実施した。これは各校園を訪問して、指導している児童やその周辺の子もたちの学校生活や学習の様子を参観して、担当者と懇談しながら情報交換するものである。その結果、担任との連携が密になり、お互いに今後の指導に生かせる利点があった。

保護者との連携では、10年前に保護者同士の横のつながりと相談できる場の提供を趣旨として保護者の会「宇宙」が立ち上げられて以来、活発な活動が行われており、全国でも数少ない保護者の会の活動を発足当初から支援してきた。

ことばの教室・通級指導教室の地域での役割について

ことばの教室と通級指導教室があるという生駒市が持つ施設を最大限に活用していくために地域のセンター的な役割を持たせていくこととした。校・園・各機関との連携をはかり、生駒市独自の特別支援コーディネーター研修会を積極的に企画していくことで特別支援教育の推進をはかっていた。



2 成果及び課題

最近、学校生活に適応しにくい子どもの相談が増えている。発達障害のある子どもたちが、いじめの対象となったり、適応できずに不登校につながるケースや、担任が発達障害の特性を十分に理解できないために対応が不適切になってしまうケースもみられる。通級指導教室の様々な取組を、少しでも子ども・担任・保護者への支援に繋げていきたい。

今まで通級指導教室では、特別支援教育に関する専門性を蓄積してきたが、これらを生かしていくために、指導・相談はもとより巡回相談、校園の研修など地域のセンター的役割を担い多面的な活動が求められていくであろう。しかしながら、専門性の高い人材の確保や指導者の育成等の問題を抱えている。また、他府県に比べて本県の通級指導教室（LD通級も含めて）は少ないために、県下の子どもたちや保護者、担任を支援できる体制のさらなる拡大が必要であると考えます。生駒市では、市の事業として今年度末よりLD・ADHD・高機能自閉症等の発達障害の指導・相談施設が開設される予定となっており、新たな展開が期待される。

今後も家庭・学校・他機関を結びつける橋渡しの役割を担い、『協育』を推進していくことで、困っている保護者、担任、そして一番困っている子どもたちのために、支援の一端を担っていきたい。

3 その他参考となる事項

県教育研究所集録（平成8年度「障害の状態や能力・適性等の把握と個に応じた指導」）大阪教育大学障害児教育研究紀要（平成16年度「読み書きにつまずきのある児童への指導に関する一考察」、17年度「地域でのセンターとしての役割についての一考察」、18年度「個々のニーズに対応した教育的支援の現状と課題」）

生駒小学校通級指導教室・ことばの教室 <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/kotoba/>

1 実践内容

(1) 昨年度の取組

障害児学級担任として、次年度から始まる特別支援教育は、特別支援学級担任だけの問題ではなく、全教職員の問題であり学校全体の意識を高める必要があると考え、4回の研修を実施した。

- 1回目... LD、AD / HD、高機能自閉症等の発達障害の概要について
- 2回目... ソーシャルスキルについて
- 3回目... 個別指導の公開授業
- 4回目... 法令の改正と校内のシステムについて



(2) コーディネーターとして取り組んできた内容

・時間割の操作

幼・保の連絡会、校内委員会等で、支援が必要だと思われる児童について、前年度中に教職員の共通理解をしておく。新学期になってから支援が必要な学級に対して、人権担当、少人数指導教員、特別支援学級担任の支援が受けられるように専科等の時間割に配慮する。この支援は固定的なものではなく、その時々でより支援を必要としている学級に入れるように、学期ごとに時間割を少し見直す等の工夫をしている。

・授業内容の見直し

個別学習の充実はもちろんであるが、週2回の合同学習の時間（なかよしタイム）をソーシャルスキルトレーニングの時間として取り組んだ。話し合い活動では、話し合いのルールを守って「自分の意見を発表する」「友達の意見を聞く」に重点を置いて進めた。また、絵カードを使ってのソーシャルスキルトレーニングでは、学習内容を必ず自分の生活に当てはめて振り返らせた。

なぜなら、構造化された分かりやすい絵は、逆に言えば一般化しにくいわけで、絵カードの学習で終わってしまうとせっかくの学習が実生活に生かすににくいと考えたからである。

今年度の2学期より、保護者との教育相談の結果、医師の薦めもあって通常学級に在籍する児童が実際に参加している。週2時間とはいえ、その学級の学習時間から抜けるわけであるから、学習に支障がでないように配慮している。

・保護者からの相談

保護者から子どもについての相談があった場合、どのように対応していけばよいか、話を聞いた上で具体的なアドバイスをする。基本的に担任と同席して相談するが保護者の希望を優先し、保護者の悩みに共感する態度で問題の解決にあたる。（学級担任や保護者から児童の様子についてくわしく聞き、保護者の受け止め方等に十分配慮し



ながら学級でできる支援、家庭でできる支援などを具体的に専門用語を使わずに話すように努める。)

- ・学級担任からの相談

児童の実態把握のために、学級担任から詳しく話(学習面、生活面、交友関係)を聞いて、その児童の特性を理解する。学級担任に児童の特性を理解するための資料を提供したり、学級担任が「今できること」について具体的にアドバイスをする。

また、校内委員会にかけて、教職員の共通理解を促すとともに、保護者への働きかけ等に対しては、学級担任を支援する。

- ・情報の共有

本校では、6月上旬に全教職員が共通理解すべき児童を、各学級ごとに名前を挙げて報告し、全職員が同じ対応をとれるようにする。また、年度の終わりにはその変容を報告し、次年度への引き継ぎを兼ねる。

- ・校内就学指導委員会の運営

個別指導を勧めた方が望ましい場合や、教育相談を受けて保護者に児童の能力の特性を理解してもらいたい場合、経過を見守り学年の引き継ぎを確実にしていかなければならない場合等、あくまで窓口は担任であるが、学校全体の問題として取り組み、担任が一人で抱え込んでしまわないようにする。

また、教育委員会、教育研究所の特別支援教育部、中央こども家庭支援センター等の諸機関ともスムーズに連携がとれるようにする。

- ・先生への直接の支援

登校指導の支援をしたり、特別支援学級在籍児童の交流学級への入り込み授業の時に、通常学級担任と連携して、気になる児童への机間巡視をしたりする等の支援を心掛ける。

- ・実態把握のための検査

児童の実態把握をして、能力の特性を担当や保護者に理解してもらい、家庭と学校が協力し合える環境を整えるために、保護者の同意があれば複数の検査(WISC - 、K - ABC 心理教育アセスメントバッテリー、S - M 社会生活能力検査、PVT 等)を実施した。速やかに結果を出して、保護者の子どもへの思いに配慮しながら、これからの目標やそれに向かって家庭や学校が協力してできる具体的な支援の内容について学級担任も交えて話し合いをした。

- ・市特別支援教育部会に於いて

昨年度は発達障害について、今年度は K - ABC 心理教育アセスメントバッテリーの実施方法について、部会で話をした。

2 成果及び課題

- ・教職員の理解もあって、特別支援教育に関して良いスタートが切れたと思う。
- ・幅広いネットワークを構築するためにも、特別支援学校を活用していく必要がある。
- ・人権教育や生徒指導の分野との連携を密にしていかなければならないと考える。

事例番号 12 小学校 特別支援教育の部

校内支援体制の確立と個別の指導計画の作成に向けて

天理市立二階堂小学校 教諭 吉岡 昌則

1 実践内容

平成 19 年度から「特別支援教育」が本格的に実施されるのにとともに、本校では、平成 17 年度から、校内支援体制の在り方について少しずつ取組を進めることになった。

そんな中、私自身も、奈良県教育委員会主催の「特別支援教育コーディネーター養成講座」を受講し、本校特別支援教育コーディネーターとしてその取組に加わり、本主題の達成に向けて各機関と連絡調整を図りながらその職責の遂行に努めた。



今回は、紙面の都合上、平成 18 年度から平成 19 年度の本教育のスタートに至るまでの取組の一端を報告したい。

(平成 18 年度の取組)

～ 校内委員会設置と個別の指導計画の作成に向けて ～

一学期中に、従来からある「障害児教育推進委員会」を「校内委員会」に移行する準備をし、全職員にもその方向性を提案した。

その後、二学期から本格的に「校内委員会」をスタートさせ、児童一人一人のニーズに即した個別の指導計画の作成に向けて取組を進めた。

< 校内委員会の主な活動内容 >

各学年部からリストアップされてきた、特別な支援を必要とする児童のアセスメントシートをもとに、本校児童の実態を把握するとともに、平成 18 年度、校内委員会で支援体制を組む児童を決定する。

天理市教育総合センターや巡回教育相談員と連携しての教育相談に向けて、保護者への働きかけをする。

二階堂養護学校高等部の巡回コーディネーターを交えての校内委員会を月一回定例化し、当該児童への支援方法の検討や支援体制についての協議を重ねる。

教育相談や心理検査の結果をもとに、校内委員会で指導仮説を立て、個別の指導計画を作成し、学級担任とともにその指導の成果と課題をまとめていく。

「教師の気付き」という視点で、校内職員研修会を計画・実施する。

校外の各種専門機関との連携体制を確立する。

(平成 19 年度のスタート)

～ 校内支援体制の充実・発展に向けて ～

「特別支援教育」の本格的なスタートにとともに、従来の「研究推進委員会」「人権教育推進委員会」と並ぶ委員会として、「特別支援教育推進委員会」を開設し、その下に、「サポート委員会(校内委員会)」「特別支援学級運営委員会」「就学準備委員会」の三つの委員会を置き、校内支援体制を更に充実・発展させるための取組を進めている。

また、年 3 回(6、8、2 月)、児童の実態交流会を開き、全職員の共通理解を図りながら、児童の実態や保護者の願いに即した支援につなげていければと考えている。

特別支援教育
推進委員会

校長、教頭、教務
特別支援学級担任
人推、学年部代表
特別支援教育
コーディネーター
等

サポート委員会

- ・ 特別な支援を必要とする児童の実態把握
- ・ 事例についての検討
- ・ 関係機関との連携
- ・ 個別の指導計画の作成
- ・ 担任への支援
- ・ 保護者との窓口
- ・ 研修の計画 等

特別支援学級運営

- ・ 特別支援学級在籍児童の個別の指導計画作成
- ・ 学級の運営
- ・ 保護者会の運営
- ・ 天理市特別支援学級担当者会及び関係機関との連携 等

就学準備委員会

- ・ 幼稚園及び保育所との連携
- ・ 就学前の児童や保護者の窓口 等

2 成果及び課題

(成果)

本校の職員だけでなく、二階堂養護学校高等部の巡回コーディネーターに常時加わっていただいていた校内委員会を立ち上げることができた。

担任・保護者・教育相談機関・校内委員会等が比較的上手くスムーズに連携できたので、特別支援学級に在籍する児童だけでなく、通常学級に在籍している児童の個別の指導計画も作成することができ、それをもとにして、通常学級担任が通常の学習の場で支援することができた。

「教師の気付き アセスメント 個別の指導計画の作成 実施 評価」といった一連の取組の流れを体系化することができた。

平成 18 年度の取組をもとにして、平成 19 年度から新しい校内支援体制を確立しより充実・発展させるための取組をスタートすることができた。

(課題)

昨年度までは、校内の支援体制を確立することが一番の目的であったが、平成 19 年度からは、「実践」に重点をおいた取組を推進していかなければならない。そのためには、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」支援（指導）するのかといった具体的な話し合いを重ねていく必要がある。

今までの支援組織や体制にこだわることなく、本校の実態や児童・保護者のニーズに合った校内支援体制へと更に発展させていく努力を続けていかなければならない。

「計画 実行 評価」という活動のサイクルを確立させ、更に充実した一人一人の個に合った支援内容を創造していかなければならない。

1 実践内容

□ 視力検査への取組

K君は、ランドル氏環検査表（電光掲示式）を見て、切れ目の方向を言葉で伝えたり指差しで示したりすることが出来なかった。何とかして視力検査が実施できないものか。ランドル氏環検査表に替わるものはあるか。そこで、教えてもらったのが鳥・魚・蝶・犬を黒塗りで



表し、順に小さくしたものである。学習では、絵を見て同じ絵を探し取ることができていたので、これはできるかもしれないと期待できた。早速検査表にある絵と同じ物を用意し、こちらが指し示した絵と同じ絵が取れるように練習を始めた。休み時間も授業の合間も繰り返し繰り返し練習を重ねた。初めのうちは、検査表のすぐ近くで、慣れてくると少しずつ距離を離れた。遂に検査が出来る距離になってもその場を離れることなく、こちらからの指示を聞いて同じ絵を取ることができるようになった。こうして無事に視力検査を済ませることができた。



□ 数字を書いた

H君は、回転するもの特に換気扇に強い関心をもっていた。絶えず換気扇を見に行きたがり授業にはならなかった。そこまで好きならと換気扇の羽を取り外し教室に持ち込み、羽をなぞるようにして換気扇の絵を描かせてみた。うまくいった。「1番目の羽根」「2番目の羽根」・・・と一緒に数えた。喜んだ。描いた換気扇の羽根に数字の「1」を書き「1番目の羽根」「2」を書き「2番目の羽根」と続けた。好きな羽根に数字を書くことに関心を示し、鉛筆を持ち、書いた数字をなぞることをするようになった。そこから、数字が書けるようになった。鉛筆の芯がとんがったままの筆箱を開け、「今日もそのままやった」と力なくつぶやいたお母さんの顔が、この日微笑んだ。



□ くじけずがんばって書けた名前

T君は、鉛筆を持って筆圧が弱く、縦や横に薄い線が引け、円に近い曲線が書ける状態であった。鉛筆の持ち方と縦横の線・波線や円を大きな紙に書く練習を続けた。点線をなぞる。点線の点の間隔を次第に広げ、時には手を添え、がんばった。手首や指の動かし方にも注目し、柔らかく動かせるように鉛筆を持った状態で指を動かす運動も試みた。だんだん出来てきた。いよいよ名前へ。大きなマス目から始める。嫌になって鉛筆を放してしまうことも、席に着きたがらないことも。それでも、くつろいだ後に、好

きなことをした後、がんばった。がんばらせた。とうとう自分の名前にある「ま」が書けた。本人はいつもの顔をしていたが、担任は喜んで連絡帳に書いた。

□ ハンバーガーでお金の学習を

Sさんは、ハンバーガーやラーメンが大好きだ。教室でもハンバーガーを買って食べた時の話をよくしてくれた。「これは、チャンスだ」お金の学習に取り入れられないか。早速、近くのハンバーガー店とラーメン屋に出向き、メニューを頂いてきた。そして、市販されている玩具のお金を準備し、金種を知ることから始めた。金種についての理解が進んでくると、位の枠を設け、その中に表示額と同額のお金を順に並べた。好きなハンバーガーのメニューを見ながらなので、繰り返しの学習にも集中できた。5円・50円・500円を使うことは難しく、これ以降の課題に残ることになったが、1円・10円・100円は、数字で表された価格に合わせて机の上に並べることができるようになった。自信もついてきたので、お店に出向き、大好きなハンバーガーを購入することにした。店員さんとの受け応えで多少の戸惑いが見られたものの、間違えずにお金を並べ、無事購入することができ、笑顔一杯で美味しそうに頬ばった。

□ CDラジカセのジグソーパズル

CDラジカセに関心が強いM君と一緒に、ラジカセの絵を描いてジグソーパズルを作った。電動糸のこぎりを使う時も手をもって一緒に切った。「パズル」「学習」「パズル」「学習」で徐々に、机に向かうことに抵抗がなくなってきた。

2 成果及び課題

どうすれば文字を獲得してくれるのか、どうすれば数字を書いてくれるのか、どうすればこれができるようになるのだろうかと悩む。「その子の興味関心を手がかりに取り組んでみよう」との話はよく聞く。障害のある子と出会い向き合う時、鉛筆をもち、ノートを広げ、「さあ」と意気込む。でも思うようには進まない。興味関心を手がかりにと言われても、どう取り入れていけるのか悩む。進まない日々焦る。焦れば焦るほど空回りするが、ここを乗り越えていく方法の一つに、その子の興味関心に寄り添った教材教具を考えていくことがあると思う。釣りが好きな子は、魚の名前からひらがなを、ポケモンの好きな子は、カード見ながらカタカナを覚えたと言う話も聞く。学習の進捗が気にかかり、遠回りに感じるかもしれないが、振り返ってみると却って近道だったと感じることは多い。

次に、学習態勢が取れるようになってくると、粘り強く、挫けず、繰り返すことも、できなかったことを克服していく上では大切なことだと考える。「今日もこれ以上進まなかった」と振り返る日々が続き、落胆するかもしれない。でもその繰り返しは蓄積され、いつか実を結ぶための力となっていくと信じたい。そして、一つのハードルを越えた時、その向こうに広がる可能性は大きくなる。

子ども達の日頃の様子を観察し、好きなこと得意なことを感じ取り、そのことを学習に活かす創意工夫から、机に向かう楽しさ、やってみようとする気持ちの喚起、できる喜びを味わえるような取組を進めていきたいと考える。

1 実践内容

本校の教育目標のひとつは「郷土を愛する生徒の育成」である。郷土を愛するということは、文化や伝統などを重んずるだけではなく、環境を守ることも大切だと考えた。人格を磨きながら郷土愛を育む取組として、「たばこの吸い殻拾い活動」について報告する。

平成18年4月。本校に赴任して4年目の春を迎えた。

1学年4学級、計141名の規模、校区内には世界遺産の法隆寺や藤ノ木古墳などを有し歴史的にも観光地としても知られる環境が、前任校から引き続く私の思いを一層強くさせた。その思いが「たばこの吸い殻拾い活動」であった。前任校では学級担任として自学級にて1年間の継続したこの活動に取り組んだ。通学途中などで路上に落ちているたばこの吸い殻を毎日毎日こつこつと拾うという、地味ではあるが人として立派な行いの内容である。この活動を、今度は1学級だけではなく、学年全体としてぜひ取り組みたいと考えた。

4月当初、学年会議にて内容を提起したところ、やってみようという前向きな結論が出て4月下旬に生徒たちに活動内容の説明と保護者への案内をした。不衛生な内容の取組であることから、慎重に準備を進めた。日々の活動の流れは以下の通りである。

- ・登下校でたばこの吸い殻を拾い集める。
- ・登校した際に「たばこ回収箱」に投入し、記録ファイルに投入本数を記入する。
- ・毎月学級ごとに本数集約を行い、たくさん落ちていた場所や成果などをまとめておく。
- ・9月の文化祭では中間報告として、吸い殻でオブジェを制作したり、よく落ちていた場所をMAPにまとめたり、たばこの害や環境問題について調べたり、拾った本数に関わる数字のエピソードなどをまとめる。特に環境問題については、プロジェクター等を使用しプレゼンテーションをひらく。
- ・3学期には全体のまとめとして、卒業文集用の原稿を作成する。

<学年からの準備物> ビニール手袋(全員に配布)

<各自の準備物> わりばし(拾うときに使用)、ビニール袋(吸い殻を入れるため)

当初は活動自体に抵抗を持つ生徒も少なくはなかったように思われる。最近の子どもたちは「すぐキレル。我慢できない。無関心だ。」といわれる風潮にある現代だが、子どもたちは打てば響いた。単発のクリーンキャンペーンではなく、善いことを継続してやり遂げることができた。





たばこの吸い殻を空のペットボトルに詰めて、法隆寺五重塔のオブジェを制作、文化祭等で展示した。
(高さ2m、吸い殻13万本使用)



朝の登校時の様子である。
前日の下校時と当日の登校時に拾った吸い殻を「たばこ回収箱」に投入している。

「先生今日な、めっちゃ拾ってきたで。」
「あそこの交差点かなり落ちてるで。」
「今日は拾ってる目の前で捨てられてん。むかつくわ。」
「朝、バスの運転手さんからほめられたよー。」

など、毎日生き生きとした感想が飛び交った。活動の様子は奈良新聞や町の広報誌などにも紹介された。また、学年の取組として生駒郡人権教育研究大会でも発表し、たくさんの反響の声もいただいた。この忍耐力と奉仕の精神が、日々の清掃時間などへの取り組み方の変化もよんだ。

2 成果及び課題

成果としては、まず生徒自身の意識の変化が大きかった。4月当初「面倒くさい。」とか、「そんなに落ちてないのではないか。」などの意見が大多数であったが、実際に路上に目を向けると予想以上に落ちていることに気付く。拾い始めると夢中になり活動してくれた。当初1年間で10万本の目標をたててスタートを切ったところ、12月までに20万本を超えてしまった。ひとりで1日に1000本拾った生徒もいた。また、たばこの吸い殻以外のゴミにも気がつき始めた。次に、保護者や地域の方々の中で一緒に活動してくださる方も出てきた。近所の方や地域の事業所の方から、日々励ましやお褒めの言葉をいただくことが生徒たちのやる気を一層引き立てた。生徒たちの行動が大人や地域の人々の意識をも変化させたのだと思う。

課題としては、この活動の成果を大人がいかに関心を受け止め、将来への展望を持ち美しい環境を整えていくことではないかと思う。

3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩中学校メールアドレス ikarugan@m4.kcn.ne.jp

1 実践内容

本校は22学級、生徒数599名の中規模校である。学習指導と生徒指導の両輪の取組が相まって数年前から落ち着いたのある学校になりつつある。

教師と生徒、生徒同士の信頼関係を大切にし、生徒のマナーの向上を目指し、いじめのない明るく楽しい学校づくりに取り組んでいる。

年度末の総括から、いくつかの課題が明らかになった。この課題を解決するために教務主任として関わった実践の一部を報告する。



(1) 学力向上に向けての取組

各教科では、基礎・基本の確実な定着を図る指導を工夫しているが、低学力傾向は長年の課題であった。平成18年度に低学力の背景を分析するために、1、2年生を対象に学力調査（国語・数学・英語）及び生活状況調査を実施した。学力調査からは読解力や表現する力が不足しており、また生活状況調査からは学習に対する関心・意欲が低いという課題が明らかになった。

このような分析をもとに、本校の学力向上プロジェクト実施のために本年度「学力向上委員会」を立ち上げた。調査結果を総合的に分析・考察することで、本校の課題を整理し、学力向上に向けたプランを策定している。

(2) シラバス作成の取組

昨年まで、各教科では年度当初に生徒に教科目標、学習計画や評価方法等について資料等を配布して説明していた。しかし、生徒や保護者にとっては、教科ごとに様式が異なることや保存して活用するのにも不便があった。

シラバスは教員にとって、授業方法や評価方法を改善するための重要な判断材料の一つであり、教育活動の質的向上を図る手がかかりになるものである。また、生徒一人一人が学習目標を設定し、学習状況を評価する取組を通して、生徒の自己教育力の向上を図る計画書の役割を持っている。

そこで、シラバスの意義について研修を重ね生徒が活用しやすいように様式を統一することにした。昨年度末から教科会議で検討を重ね本年度当初にシラバスを配布した。来年度に向けてさらに活用できるシラバスを目指して改訂を行っている。

(3) 学習指導の工夫改善の取組

本年度は、校内初任者研修、郡初任者研修会、郡英語研究大会、奈良県中学校理科研究大会が本校で開催された。授業を公開することによって授業者だけでなく教員全体が学習指導の工夫改善のヒントを得ることができ大変有意義であった。

また、ICTサポーターを講師に迎え生徒の学力向上を図るために授業における効果的なICT活用事例について研修を行った。さらに、奈良教育大学と連携し「実験・観察融合型デジタル教材活用共同研究」に取り組んだ。その成果を奈中理研究大

会で発表し研修することができた。この取組によってICT活用のハード面を整備することができ、効果的に活用することで学習効果が上がることが分かった。今後も学習指導の工夫改善の取組の一つとして授業研究を中心に据えて研修していきたい。

(4) 校内研修の取組

学校教育目標を具現化するには組織が機能するとともに有機的につながり、それぞれの部署における取組が小集団のものに留まらず教職員全体のものにする必要がある。大きな組織になるとどうしても学年や各部署だけの取組に終わってしまうことがあり全体に広げることが不十分であった。そこで関係部署と連携をとり校内研修を計画的に実施した。

- ・生徒理解 ・生徒指導 ・特別支援教育 ・救急救命
- ・人権教育 ・指導と評価等

研修を行うことによって、内容が一部の教職員だけのものではなく、部署、学年の領域を越えて学校全体の問題として捉えることができるようになった。

(5) 授業時間数の確保、成績事務軽減の取組

学力向上を目指すためには、授業時間の確保は必須条件である。教育課程を実施するには諸条件をクリアして時間割を作成する必要があるため年度当初の時間割作成作業は非常に複雑である。作成した時間割は、行事や出張、休業日の曜日の偏り等ではほぼ毎日変更の必要が生じてくる。学年教務と連携をとりながら授業時数の確保と学級ごとの時間数のバランスをとっている。毎週、各教科、学級ごとに授業時数をカウントした表をもとにして時間割を調整し授業時間数の確保を図った。

また、成績処理や通知票作成の時間を軽減するために進路事務担当と連携をとり従前の成績処理のソフトをより使いやすいものに改善した。

2 成果及び課題

落ち着いたある学校がもどってきた背景には、学校長の経営ビジョンが教職員に共有され、それぞれ教職員が前年度の踏襲ではなく従前の取組を見直し、少しでも魅力ある学校にしていこうという教職員一人一人の意識が高められたことが大きい。取組によって生徒の学びの意欲も向上しつつある。継続した取組によって学力向上をより確かなものにしていきたい。

課題としては、それぞれの取組が単年度のもので終わるのではなく、中期的な計画を立てることが重要であると考え。そして、実施、点検、評価、改善のPDCAのマネジメントサイクルを学期ごとに運用し、計画の修正を加え学校教育目標を達成できるようにしていきたい。

学校、保護者、地域の連携がうまく機能してはじめて学校はよくなっていく。現在の取組やその成果を保護者や地域に情報発信できる機会を多く持っていきたい。地域の学校として、生徒、教職員や地域が誇れるスクールアイデンティティを持てる学校にしていけるように尽力していきたい。

1 実践内容

片塩中学校に勤務し今年度で25年目を迎える。その間担任、副担、同和教育推進教員となり1996年度からは学年主任、2004年度から教務主任となり、今年度は教務主任として4年目となる。

本校は県下有数の大規模校であり、勤務当初は学年に13クラスをかかえ、今日なお普通学級28学級、特別支援学級3学級を擁し、在籍生徒数は1,000名を超える。大規模校ゆえにかかえる課題（家庭に起因する「荒れ」や「ゆれ」・志一致の徹底・行事を行う際の動きづらさ・学年をこえた情報の緊密な交流・など）は多く、私のテーマとして「生徒・職員にとっていかに過ごしやすい片中所をつくるか。」を設定し、教務主任として引き継いだ書類の質・量に驚きつつ、すべての先生方に支えられて仕事を行っている。



校務の分担・会議の円滑化について

学校運営組織として、学校長、教頭の下に教務部、校務・渉外部、生徒指導部、研究・研修部、事務部があり、教務部はさらに教務管理、進路指導、人権教育、総合学習、障害児（特別支援）教育に、生徒指導部は教育相談と生徒指導に分かれている。学校長、教頭をはじめここに筆記した各部代表に各学年主任を加え運営委員会を構成し、各部からの報告・提案を基に職員会議案の練り直しを行う。職員会議での承認をスムーズに運ぶため、委員会までに、細かく各部・各学年に配慮し、情報（提案・協議事項）の事前把握・調整に努めることに留意している。

授業時数の確保と行事、総合学習

本校では各学年の生徒数が小規模校に匹敵する故、年間を通して各学年の行事の重なりや、学年学校行事を行う際の授業担当者の負担に配慮している。また、自習を極力避けるため、職員が書き込める月ごとの出張等の予定表をつくり、学年の時間割の担当者が授業の調整を行っている。学年の教科担当者が複数になる教科が多くあるため、機会を捉えて時数・進度の調整を行っている。普段の授業の変更は学年ごとに行い、年間を等しての確保・調整を教務が行うことにしている。

総合学習の時間を利用し、今年度はその内の1時間分を毎日の朝の会に10分ずつ含め、「朝の会・総合」として15分を設定している。1・2年生は「読書」、3年生は進路に関わっての「自主学習」の時間として、担任だけでなく教師全員で取り組むこととした。

朝の会で時間的余裕ができたことで、教頭から指摘されていた「一人ひとりの生徒の顔を見ての朝の会」に近づくことができた。また、始業時までに家庭から連絡のな

い遅刻欠席者の確認と家庭連絡が担任まかせにならず、学年全体でできるようになった。

他の総合の時間は各学年のテーマに沿って進めている。学年の主なテーマとしては、1年時「環境問題」、2年時「国際理解」、3年時「進路」を設定し、学校周辺の清掃を行う環境体験学習、在日の講師を招いての人権学習講演会、高校の先生を招いての進路説明会などを各学年ごとに行っている。

テーマの一つである「環境」については日々の生活の中で考えさせたいことであり、身近なこととして、昼食時の牛乳パックは教室内に保管して販売業者に、廃棄する古紙・ダンボールは市の福祉作業室の回収（月2回）にゆだねている。さらに配布プリントの持ち帰りの徹底や毎日の全員清掃などを通じて、手入れの行き届いた「ゴミ0」の学校を目指したい。

校地・校舎内の美化・営繕

鍵の管理を含め、「どこに何があるか。何が必要か。何が必要とされるのか。」を常に把握することで、職員の依頼・相談にすぐに答えることができる。学校生活上に起こる様々な細かな施設・設備面での問題、「トイレの水が流れっぱなしになっている。サッシの金具がこわれている、閉まらない。黒板が動きにくい、傾いている。雨樋が詰まっている。机いすが壊れた。壁に穴が開いている。等々」は実に多くあるが迅速な対策を講じるようにしている。

より良い学習環境を維持するために、机・椅子の管理、様々な補修用品の確保を行い、屋内の修理が必要な箇所については学年の営繕担当とともにできる範囲はすべて職員で行うようにしている。また、各学年とも年度末に営繕作業日を設け、係の生徒とともに床の油引きや、壁のペンキ塗り、机の天板の取り替えなどを行っている。数年前の春期休業中に職員で一学年の机すべての天板（約370枚）の交換を行ったことがある。年度当初の新しい学級でのきれいな机を生徒たちは喜んでいた。落書きや傷つけることのないような指導とともに、よりよい学習環境作りに努めたい。

2 成果及び課題

本校は大規模校ゆえのネガティブな課題は確かに多くある。修学旅行の宿泊先にしても人数で制限を受ける。4小学校の生徒が集まることで、生徒の人間関係上のトラブルも多くある。

しかし「多くの人が集う」というマンパワーの面では他校に図抜ける部分も多く、生徒一人ひとりを見つめ・つなぎ・組織化することで、体育大会・音楽会・球技大会などの学校行事に高揚・感動を生み出し、部活動の成果などをもたらしている。

前述の自分のテーマ「生徒・職員にとっていかに過ごしやすい片中をつくるか」に対し、「どこに何があるか。何が必要か。どうすればよいか。」といった環境整備に関わる物的技術的な面でのサプライは少しずつできるようになってきた。学校長が掲げる『一生懸命』の合い言葉のもとに学校目標実現のため、次の段階として諸活動の組織化に努めたい。

1 実践内容

私は、学年主任を担当させて頂いて4年目になる。昨年度までの3年間を振り返ると、初めての学年主任ということもあり、なかなか3年間を見通して生徒を指導することができなかつたのではないかと感じている。幸いにも卒業式では、生徒や保護者のほとんどが、感謝の気持ちを表しながら卒業していったように思うが、本当にそれでよかったのか自分の中で自問自答していた。教養教育の基礎としての「読み・書き・計算」や「国語の力」などを身につけさせることができたのであろうか。また、自らの興味・関心に基づいてさらに深く学びたい子どもの意欲に応えることができたのであろうか。など私自身にとってやり残したことが多くあったのではないかと考えている。



そんな中で今年度も学年主任をさせて頂くことになり、昨年度までの反省を元に何かを変えていかなければと考えているときに、もう一度初心に戻ろうと考え、新任の頃に先輩教員から「学校生活は朝が勝負だ。」「遅刻は絶対に駄目。」「朝の会は大切。」などの教えを請うたことを思い出した。また、新年度当初の職員会議で学校長から「朝の読書タイム」の充実といった内容の提案があり、私の背中を押して頂いたように感じ「私の学年は『朝の読書タイム』に懸けてみよう」と決心した。

具体的な取組として

入学式後の保護者への挨拶の中で、「朝の読書タイム」の意義を説明し理解を求め早速に本の準備をお願いした。

保護者会・三者懇談会・家庭訪問等において、「朝の読書タイム」の話題を必ず出すことを教職員間で共通理解を図った。（その都度、事前に学年会議を開き徹底する）

学年集会等で、生徒に「朝の読書タイム」の意義や過ごし方について説明と指導。

- ・ 8時40分～50分まで静かに本を読む。
- ・ この時間は読書以外はしてはいけない。
- ・ 必ず本を準備すること。
- ・ マンガ本はダメ。

学年の教職員全員で必ず指導に当たる。

- ・ 学級担任は自教室で読書をする。
- ・ 学年係りは廊下または教室で読書をする。

以上の4点を挙げるができる。

最近は特に生徒たちや教職員のなかに、「朝の読書タイム」は定着してきたように思われるが、現在の課題でもある基礎学力の向上に何とか結びつけられないかと学年で検討した結果、「朝の読書タイム」を発展させた形で教科担当の先生方にも協力していただきながら、2学期から終わりの会で2～3分間程度の「百マス計算」に取り組んでいる。この「百マス計算」も生徒の中で定着してきた頃から、終わりの会が今まで以上に落ち着いた形でスムーズに進められるようになったのではないかとと思われる。

2 成果及び課題

「朝の読書タイム」が定着するにつれて、年度当初は多くみられた生徒間トラブルや問題行動が減ってきたように思われる。特に遅刻する生徒の人数は、平均1日当たり1人～2人程度に減った。これは、生徒のなかで読書に対する興味や関心が高くなっただけでなく、保護者の方々が「朝の読書タイム」についてご理解していただいているからだと考えている。



最近では「朝の読書タイム」が始まる5分前(8:35)には、ほとんどの生徒が席に着き自主的に読書をしている姿が見られるようになってきた。今後は、この生徒たちの自主性を発展させ、「チャイム着席」や「5分前行動」など学校生活の中で授業はもちろんのこと給食や清掃活動においても場所・時間等を絶えず考えながら「けじめある学校生活」を送らせることができると考えている。

また学年の教職員全員が、教室や廊下等で生徒と一緒に読書することによって、生徒たちの様子を朝から見ることができ、担任はもちろんのこと学年の教職員全員が学年で起きているさまざまな問題や気になる生徒についての情報が共有化できるだけでなく、未然にトラブルや問題行動なども防げているのではないかと考える。



昨今の情報化社会において、携帯電話やパソコンを利用することが中学生のなかでも当たり前になってきているが、今こそ本を読むことを日常生活のなかに定着させ、情緒を豊かにし、美しいものに感動する心や人権を大切に育んでいくことができれば、「いじめ」の防止や解決にもつながっていくのではないかと考える。

最後に、多方面からご理解とご協力をいただいた保護者の方々や平群町教育委員会の先生方には改めて感謝申し上げます。

1 実践内容

本校では、体験的な学習を通して理科への興味・関心を高め、科学的に自然を見る目や観察力を育てるために、第3学年において理科の野外観察を行っている。本校生徒を対象にした調査によると、海に行ったことのある生徒は多いが、そのほとんどが海水浴や潮干狩りで、磯の生物を見たことがない生徒がほとんどである。また本校周辺には地層の観察に適した場所がなく、実物の地層を見たことがある生徒も少数であった。そこで地層と磯の生物を同時に観察できる和歌山市で野外観察を行うことを計画した。



和歌山市加太周辺は海岸の動植物や潮の流れ、地層の観察を行う上でたいへんよい条件に恵まれた地域で、海岸のがけには砂岩や礫岩からなる和泉層群の露頭が見られ、明瞭なしま模様を見せている。また磯では侵食された泥岩の層がくぼみを作り、干潮時に多くの潮だまりとなる。そしてそこでは多数の海岸生物を容易に観察することができる。さらに加太港から高速船に乗れば約20分で紀淡海峡に浮かぶ友ヶ島に到着する。船の上からは激しく渦を巻く潮流や、島の地層も観察できる。淡路島をすぐ近くにのぞむ友ヶ島では暖帯の海岸植物の群落が広がり、リスやシカなどの野生動物と遭遇することもまれではない。生徒が観察中に見つける海岸生物のおもな種類は、もっとも多く生息しているヤドカリ、カニ、フナムシなど節足動物のほか、ウニ、ヒトデ、アワビ、カキ、イソギンチャク、カイメン、ヒザラガイ、カメノテ、フジツボなど20種類を超える。

生徒には学校の授業で、事前に標本の作り方、スケッチのしかたや記録写真の撮影の方法などを指導し、当日は友ヶ島でデジタルカメラによる地層の撮影と海岸動物の観察・スケッチを行っている。実施日は干満の差が大きくなる秋の大潮の日に近く、磯での観察時間帯がちょうど引き潮になる日を選んでいる。

一方、この野外観察では実物の地層を観察することも目的の1つである。この地域の地層は大きく傾いているが、地層はどこも水平であると思っていた生徒や、地層は砂や粘土が堆積したやわらかい土の層であると思いこんでいた生徒もあり、新しい発見である。さらに教科書にのっている写真では感じられない地層の広がりが理解できた、とレポートに書いた生徒もあった。潮の満ち引きや潮の流れなどに関心を示す生徒もあり、日頃の教室の授業ではあまり理科に関心を示さない生徒にも大きな意義ある時間であるようだ。



海岸での観察のようす

2 成果及び課題

生徒のレポートや感想文の中には、初めて地層を見たときの感動や、図鑑や水族館でガラス越しにしか見たことのなかった生物を実際に手にとったときの驚きがつづられていた。また、アンケートによる意識調査の結果、「この野外観察が自分にとって役に立ったと思う。」と答えた生徒は 90%を超え、その理由としては、「今まで見たことがなかった地層を見た。」「たくさんの生物を見ることができた。」などが多かった。感想文の中には「今まで想像もしなかった場所に、多くの生き物がそれぞれの環境に適応して生きていることに気づいた。人間が手を加えることで、これらの生き物の生息環境が大きく変化しないかどうか考えていかなければならないと思った。」「海には流れがないと思っていたけれど船から見ると潮の流れがあった、それも月の引力の影響だと知って驚いた。自然のしくみは不思議だと思った。」「ぼくたちが食べている魚や貝は、こんな風にして生きているんだと思うと、食べ物を大切にしないといけないと思うようになった。また漁師さんたちの苦勞がわかった。」などというように、観察したことから、自分の生活とのつながりについても考えられる生徒も現れた。このようなレポートから、体験的な学習を通して理科への興味・関心を高めるといふ第一のねらいは達成できたと思われる。

次に科学的にもものを見る目や観察力を育てるといふねらいであるが、この野外観察では生物のスケッチを通して、まず科学的な観察力を高めることにウエイトをおいた。観察や実験は理科の学習の中で、科学的にもものを見る目を育てるためにはたいへん重要であるが、日常の授業ではそのためだけに十分な時間を取ることがむずかしい。しかしこの野外観察では観察の時間が十分に取れるため、非常に細かいところまで描かれたスケッチも多数見られた。

このように、多くの面で学習の効果が得られていると考えられる野外観察である。これからも継続して取り組んでいきたいが、いくつか課題が残されている。1つは天候に左右されるという点である。過去5年間は天候に恵まれ、予定どおり実施してきているが、悪天候になった場合、このような観察がかなり制限されるということである。もう1つはこの野外観察を実施する学年である。3学年の2学期といえはすでに多くの単元の学習が終わっており、ここで得られた力をその後の中学校での理科の学習に生かす場面が少ないという点である。可能であれば1学年か、2学年で動物を学習する前後に行うことが望ましいと考えているが、その他の行事との日程の都合上、現在のような時期に行わざるを得ない。それからもう1点が観察中の安全の確保である。当日は理科担当の指導者の他に学年所属の引率者、養護教諭、管理職の応援を得て実施しているが、他の学年の授業への影響を最小にとどめながら、事故の防止に配慮しなければならない。

私はこれからも、生徒の理科への興味・関心を高め、発展的な観察や実験に積極的に取り組み、そこから得られた情報を分析しうる科学的な感性と思考力を育てるための教材開発と実践を進めていきたい。



友ヶ島で見られる地層

事例番号 19 中学校 環境教育の部

歴史的景観と自然環境の保全・保護・維持を中心においた環境教育について

檀原市立畝傍中学校 教諭 松本 清二

1 実践内容

本校は、大和三山（耳成山、香具山、畝傍山）に周囲を囲まれ校区内を飛鳥川が流れるという日本の故郷として知られている地域（2005年景観法制定、2006年名勝指定、2007年世界遺産候補リスト掲載）に位置している。しかし、景観や自然環境について学習することはほとんどなかった。そこで、平成13年度から新設された総合的な学習の時間で、環境学習を行うことになった。飛鳥川をフィールドとして河川環境と歴史的景観についての川調べ学習、学校周辺の自然調べや生活排水を中心とした学習など8～10講座を実施した（平成13年～15年）。また、3年生の選択授業において河川の改修を題材として学習指導を行った（平成16年～17年）。その間、県内の中学校では最初のエコスクールモデル校に指定された（平成14年）。



平成13年5月、地域の自然環境をまとめた環境学習用テキスト「オオムラサキがおしてくれただこと」を出版。平成15年10月、檀原市環境対策課、畝傍東小学校と畝傍南小学校の共同で「学校教育における環境学習とそれに必要な学習フィールドについて」と題して実践を発表（第7回応用生態工学会、九州国際大学）。

平成17年4月、小学校中学年から中学校1年生用テキスト「私のくらしと自然・環境」を檀原市環境対策課、檀原市昆虫館や地域のNPOの人達と協力して出版した。そのテキストをベースに奈良県人権教育研究会環境部会が改編し、CD版で県内の公立学校に配布。平成18年2月、テキストを使用した研究授業を行う。



環境学習テキスト「私のくらしと環境」を使用している研究授業（畝傍中学校1年生のクラス）。

平成17年、飛鳥川の学習フィールドが治水面から浚渫され、これまでの学習ができなくなった。そこで、地元住民の皆さん（檀原市田中町自治会）、PTA、行政（奈良県桜井土木事務所、檀原市環境対策課、同都市計画課）、NPO法人ASUKA自然塾や教育研究機関（大阪市立大学、檀原市昆虫館、檀原考古学研究所）の協力をもとめ歴史的な自然環境の修復を目標とした学習フィールドの再生を行っている。

学習フィールドは、校区田中町内を流れる飛鳥川であり北に向かって流れている。流れの正面には耳成山、上流の南を見上げると甘樫丘、西に畝傍山、東に香具山が見え、かつての藤原京内である。当時、藤原京の人々はたくさんの鳥が川に飛来する情景を眺め都の中を流れる川を「飛鳥川」と呼んだという。

具体的な修復作業は、河床内に木杭を打ち透筋を蛇行させることによって淵や瀬を再生し、多くの魚類、昆虫類や植物の生息を促進する。そして、それらの生物を求めて多くの鳥たちが棲息、飛来するような生物の多様性が実感できる学習フィールドを考えて

いる。

生存権を脅かすまでに至った自然環境の脅威。環境問題は、世界の国々が21世紀中に解決しなければいけない大きな課題である。それ故、教育の果たす役割は重要である。人権教育をベースに、持続可能な社会を目指して学校だけではなく、地域社会、行政や教育研究機関が連携することでより良い教育内容の創造と実践を目指している。



ホタルが棲める川を目指して、河床に木杭を打ち込む作業。生徒、教員、保護者や地域の人たちの協力で行っている。

2 成果及び課題

情報化社会の発達、高学歴社会は価値観の多様性を人々に認識させ教育の多様性も生み出した。いまや教育は、学校や教育委員会といった行政機関だけが担う課題ではないだろう。今回の取組を通して、そのことが一番わかっているのが地域やNPOの人達であることが実感できた。自分達の生活する自然環境を守り、子ども達に伝え残すことを通して健全

で、誰に対しても優しい地域社会が創造できることを地域の人達に教わった。

生態系の観点：飛鳥川流域や河床・岸における過去20年にわたる生息動物や自生植物のデータから、歴史的景観を加味した河川環境からより健全な生態系を教材として提示できた。

河川環境の観点：排水路、農業用水路となっている飛鳥川の問題・利水・治水の観点から、現在の利水、治水に配慮しながら自然環境に重点をおいた河川構造を指導できた。

歴史的景観の観点：1300年以上も前から開発されてきた飛鳥川、ホタルやヒガンバナという人里の自然にポイントをあて飛鳥川の景観について研究機関の専門家（檀原考古学研究所）と連携できた。

社会教育の視点：社会教育（人権フォーラム）において、飛鳥川流域を学習フィールドとして教育内容・指導方法について実践できた。

持続可能な河川環境のための地域ネットワークの構築：多くの自然形態は、地域の生活（交通・経済）に大きく影響を受けてきた。しかし、校区の自然環境や歴史的景観は、重要な観光資源といえる。河川における治水・利水・環境・景観・教育について、それぞれの立場（地元住民・行政・研究者・教員）で出し合い、連携することによって、新たな地域づくりを実践するとともに開かれた学校づくり、地域にあった教育課題や教育内容を明確にした。

以上の取り組みで試みられた方法や得られるデータは、自然環境と歴史的景観の保護・保全・再生・維持のための都市計画や教育現場において重要な資料となるだろう。

しかし、現在修復中の学習フィールドがどのような河川形態を目指すか、関係機関と協力しなからどこまで改修するかや学習テキストの改訂作業と指導方法（指導案の作成）についての検討が残る。

3 その他参考となる事項

2000年 奈良の川づくりガイドライン（案）奈良県土木部河川課、奈良、A4版pp215.

2001年 オオムラサキがおしえてくれたこと 信山社サイテック、東京、B5版pp200.

1 実践内容

私が教師を目指した理由の一つに、「バレーボール部顧問として子供たちと一緒に学校生活に励みたい」という思いがあった。というのも、私は学生の頃からバレーボールを通じて数多くの人との出会いがあり、私にとってバレーボールとは、まさに人と人とをつなぐ「縁結びの神様」だったからである。幸いにも願いを叶え教師となり、郡山南中学校で5年間と現在の香芝中学校での18年間の計23年、入部してくてくれた子どもたちやその保護者の方々とまた貴重な出会いを持つことができた。



「時代に即し、時に応じて」

入部してくる生徒は十人十色で、能力的にも身体的にも千差万別である。すべての生徒を対象に一つのやり方で練習をしても、みんなが同じように伸びるわけではない。能力の高い生徒には、技術指導の後にはただ見守りながら、気になる部分の細かいチェックをすれば伸びていくが、能力のそれ程高くない生徒に対しては、時には自分が手本を見せ、手を取り足を取って技術指導を続け、時間をかけて育てていかなければならない。その子、その子に適した練習方法を正しく見極めて、提案していくことが大切なのである。

また、最近では教育を取り巻く環境が変化し、部活動指導においても、もはや昔のようなスパルタの指導法が通用しなくなった。今の時代に適した指導を行うためには、指導者が勉強し豊かな専門知識を得るのは勿論のこと、他競技の指導者との情報交換を行い指導法を様々に工夫する必要も出てきたように思う。

指導を始めて20年以上になるが、毎年優秀な選手が揃うわけではない。だからこそ私は、3年生が引退し新チームに切り替わったときの気持ちの持ち方が重要だと考えてやってきた。「これからまた1年、今いる子たちと頑張ろう。」「たとえ1年後の結果が良くなくても、県内のどのチームよりも『伸び率だけはナンバーワンだった。』と誇れるチームにしよう。」、私はそう思ってやってきた。

「目標は優勝、目的は人間形成」

選手なら誰でも「勝利」を願う。確かに勝つことで、普段の練習だけでは得ることのできない貴重な経験を持つことができるが、部活動の「目的」はあくまでも「人間形成」であり、選手として育てる前にまず、人としてどのように育てるのが問われる活動である。私はこれまで、子どもたちには、単に何ものかに勝つという卑近な目標を超えてほしい、自分の中に勝ち負けを超越した遠大な思いを温め続けられる人になってほしいと願ってきた。また、自分以外のすべてのものに畏敬の念と感謝の気持ちを持つことを大切にし、バレーボールができるのは親や家族の協力があることや、

困難にぶつかったときに支えてくれる友達や先生がそばにいることを自覚させ、さらには、ボールや体育館への感謝の気持ちも忘れない人であってほしいとも願っている。



時には厳しく叱責したり、こんこんと人の道を説いたりすることもあるが、それでも、しっかり勉強し、掃除は手を抜かず、クラスの仕事も率先して引き受け、その後に、大好きなバレーボールに汗を流している子どもたちを見ていると、私の思いは確実に届いているのだと感じる。

放課後の練習風景

「スポーツ選手は体が資本」

「無事これ名馬なり」という諺があるが、人間もまた然りである。人間が体調を崩さないためには幾つか条件があるが、私は選手たちに、一定の生活リズムを維持することや睡眠時間を充分に取ることに「虫歯の治療をすること」を指導してきた。いくらバランスの取れた食事が準備されたとしても虫歯があるとしっかり噛んで食べることができず、体調を崩してしまう。人間にとって食事は生活していく上で欠かすことのできないものだけに美味しく食事ができることは体調管理に直結するものだと考えている。なお、友人である整骨院の医師には選手の心身両面のケアを依頼し、医学的なアドバイスをもらえるのは心強いものがある。たとえば、選手が怪我をした時でも練習を全く休むのではなく、治療を受けながらできる範囲の練習を続けられるのは、選手の精神面でのダメージを最小限にしてくれるはずだと思うからである。

2 成果及び課題

奈良県中学校バレーボール新人大会	優勝 2 回	準優勝 4 回	3 位 2 回
奈良県中学校バレーボール選手権大会	優勝 1 回	準優勝 2 回	3 位 5 回
奈良県中学校バレーボール春季選手権大会	優勝 1 回	準優勝 2 回	3 位 7 回
奈良県中学校総合体育大会バレーボール競技	優勝 1 回	準優勝 1 回	3 位 3 回
近畿中学生バレーボール選抜優勝大会	8 回出場		
近畿中学校総合体育大会バレーボール競技	2 回出場		



部員と共に

子どもたちが中学校を卒業してもバレーボールを続けながら人との縁^{えにし}を紡ぎ出し、将来は地域社会で活躍し、多少なりともバレーボールの発展に寄与するような人物になってくれたなら、これに勝る喜びはない。そのために、私に何ができるかをこれからも考え続けたいと思う。

事例番号 21 高等学校 学校教育目標の具体化の部

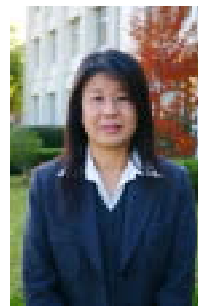
生徒が生き生きと活動できる学校づくりを目指して

～生徒の自主性を伸ばし、生徒自らが成長を実感できる教育活動の実践～

奈良県立登美ヶ丘高等学校 教諭 植杉 嘉津代

1 実践内容

本校では、1、2年生の8割から9割が何らかの部活動に所属している。入学当初は両立を目指すのが、活動の忙しさや疲れ等から、家庭学習がだんだんおろそかになっていく。「全然勉強しないねえ。」前校長の一言から取組は始まった。こんな生徒たちの学力を充実させ、なおかつ進路も保障し、社会で通用する力をも育成する。そんな方策はないかという提案がなされたのである。そこでまず、本校の目指す学校像として「生徒が生き生きと活動できる学校」を掲げ、教育課程、継続的な学習の習慣づけ、自己表現力・コミュニケーション能力の育成などの側面から、改革に取り組むことになった。私が教務部長を命ぜられて5年目になる。「総合的な学習の時間」はその前年度から、他の取組については初年度から、それぞれの検討委員会において審議を重ね、各分掌の協力と全先生方の共通理解のもとに、以下に挙げる取組がスタートした。



(1) 教育課程の改編

入学してくる生徒をめぐる状況は年々変化している。特に高等学校の再編・統合による影響は非常に大きい。また、大学入試も多様化したため、従来のままの教育課程では対応できなくなってきた。本校でも以前、4類型（文型・英語型・文理型・理数型）であったものが3類型（文型・文理型・理数型）へと改編され、平成17年度入学生からは、更に2類型（文型・理型）へと改編した。また、3年時ではそれぞれを2コースに分類し、各生徒の進路希望に対応できるよう選択科目を増加するとともに、個々の希望に応じて適切な学習活動ができるよう編成し直した。併せて、1年時でも類型選択が適切に行われるよう、進路ガイダンスを充実させるとともに、総合的な学習の時間においても学部研究、進路研究を取り入れ、生徒が自分の進路を多方面から考えられるよう工夫を重ねている。

(2) Basic Time（BT）の導入

本校では毎朝15分間、全校一斉に取り組む学習時間を設定している。自ら学ぶ意欲の向上、継続的な学習の習慣づけと家庭学習へのスムーズな移行、集中力の育成等をねらいとして、平成17年度から導入を開始した。国語・英語科を中心にBT検討委員会を設置し、学習内容や時間配当、教材等を検討している。内容は継続的に学習できる基礎的なものとし、指導は主として各クラスの副担任があたる。また、定期的に確認テストを行うが、原則として教科の評価には入れてはいない。BTではさらに、全学年とも各学期に1週間の15分読書を取り入れている。また3年生については、2学期以降は各自の進路に応じた自主学習に替えている。

主な学習内容 国語・・・漢字・語句、読解、読書 等

英語・・・語彙、文法、読解、速読、英検対策 等

(3) 「総合的な学習の時間」の充実

本校生のもっとも弱い部分であり、しかし社会で活躍するために必須条件となる「自己表現力・コミュニケーション能力」。これを着実に身に付けさせ、生徒個々の確かな進路実現を目指すことをねらいとして取り組んでいる。本校の総合企画部が中心となり、総合学習検討委員会において年間学習計画を立て、実施している。1年生の内容は自己アピール、学部研究とその発表、新聞記事論評、出身中学生に対する本校の学校紹介等である。2年生では、1年生より継続している新聞記事論評の他、ディベートを中心に据え、学年末にはクラス対抗のディベート大会も実施している。3年生では小論文学習を中心に、面接練習等を通して、「考える」、「書く」、「発表する」などについての総合的な表現力を高める取組を行っている。

(4) 学校行事の工夫

生徒のよりよい人間関係の構築と心豊かな人間性・自主性の育成の場となるように平均して月1回程度の行事が計画されている。常に授業時間の確保のため、行事の削減も考慮しなければならない状況ではあるが、活気のある学校づくりをめざし、大きな削減はしない方針でこれまでできている。行事を実施するのは生徒会が中心である。なるべく生徒自身の手で運営できるよう、各分掌がサポートしている。

2 成果及び課題

教育課程の改編については、多様な選択が可能となり、結果として個々の進路の希望に沿うものになったと考えられる。BTについては、事前の啓発もあり、新しい試みとして生徒に無理なく受け入れられたと思う。特に家庭での学習時間が確保しにくい部活動加入者には、毎日基礎的な学習が継続的にできる時間として定着してきた。これらの生徒の前向きな姿がクラス全体へのよい刺激となって、クラス全体の学習体制ができあがってきているように感じる。また、始業と同時に開始することで、遅刻も激減した。朝の15分間、集中して何かに取り組むことによって精神的にも落ち着いた状態で1日のスタートが切ることができ、生徒指導上からも良い効果が現れている。「総合的な学習の時間」では、1・2年生の共通の取組である新聞論評において各自の論評をクラス掲示し、学期ごとに優秀作品の表彰を全校生徒の前でしている。生徒の新聞を読む機会も増し、各学年の他の取組との相乗効果で、意見をまとめ発信する力も向上してきた。学校行事についても、毎回の行事において、生徒の生き生きとした顔が常に見られる。部活動未加入の生徒にとっては最大の活躍の場になる。怠惰による欠席は皆無に等しく、集団の結束力と仲間作り、自主性、協調性の育成の場にもなっている。

以上のような成果が見られる一方で、それぞれの教育効果をより高めていくための改善を必要とするところも現れてきている。また、年月が経つにつれ、設置当初のねらいや意気込み、共通理解が薄れていく心配もある。毎年度当初に、各取組についての全教師による再確認が必要と考えられる。今後も、毎年変化していく生徒の実態を的確に把握し、生徒にとって、「学校が楽しい」、「仲間がいる」、「自分が日々成長している」、「力がついてきた」と実感できる学習活動や学校生活を支援できるよう努力していきたいと思う。

3 その他参考となる事項

登美ヶ丘高等学校ホームページ

<http://www.nar-tomigaoka-h.ed.jp/>

1 実践内容

【教育課程の大幅な再編成】

教育目標の達成を目指した取組の中でも教育課程の編成はその根幹に関わる側面をもっている。

平成 13 年 9 月に答申された『県立高校将来構想』を踏まえ本校では同年、校内に「基本構想検討委員会」を設置し特色化に向けた検討が重ねられ、以下の施策が重点目標となった。

- ・生徒一人一人の個性を大切にし、基本的な生活習慣の確立と高校生としての真の学力の定着を図る。
- ・高校の学習を通して自分のやりたいことや自分に合ったことを発見し、希望する進路の実現に向けて様々な教科、科目を選択可能にする。

さらに、平成 9 年から続いた文型、文理型及び理型という類型に代わり普通(平成 17 年度に教養と改称)、国際理解および数理の 3 つのコースを設置し特色化を推し進めていくこととなった。

それぞれの進路希望に対応できるように第 2 学年からいずれかのコースを選択させることとなり、平成 15 年度入学生徒から適

各コースの特徴

普通コース	幅広い教科、科目の選択が可能
国際理解コース	外国語、地理歴史に重点を置く
数理コース	数学、理科に重点を置く

用できるよう検討に入った。教務主任として委員会に参加し、上記目標を教育課程にどう反映させるかということが課せられた。

【学校設定教科・科目】

3 コースそれぞれの特色と選択幅のある教育課程を編成し、生徒の進路をより確かなものとするため、学校設定教科及び科目について、委員会において本校独自に 1 つの教科と 7 つの科目を設定するという結論に達した。その趣旨を踏まえ、年間の指導計画の立案を各教科や分掌に依頼し、講座開設の準備を整えた。

就職希望生徒を対象に職業人としての能力、態度を養うための教科"キャリアリイゾンズ"、地理歴史あるいは政治経済の科目を総括的に捉える科目"海外事情"(のち"世界と日本"と改称)、漢字や英語の検定も視野に入れた"基礎国語"や"E V P (English for Various Purposes)"などはその一端である。独自の教科科目の設定を含めた教育課程の編成は本校にとって一大転機となった。

学校設定教科・科目

【教科】 キャリアリイゾンズ

【科目】[国語] 現代文講読、実用国語、基礎国語 [地理歴史] 海外事情

[外国語] E V B E V P [キャリアリイゾンズ] キャリアリイゾンズ

平成 18 年度入学生徒より [数学] 基礎数学 を追加設定

【特色選抜の実施と現在】

平成 18 年度入学生より県下各校で特色選抜が実施されることになり、国際理解、数



理の2つのコースを二階堂高校の特色と位置づけ、両コース合わせて120名の生徒を特色選抜で募集した。このことにより、従来の第2学年からのコースが入学時より3つのコースに分かれ、第1学年からそれぞれのコースの特色を生かした学習指導が実施されることになった。

一方、教養コースにおいては多様な進路選択が可能となるよう、また生徒の興味や関心を考慮し、選択科目が多い教育課程を編成した。しかしその反面、ある程度は予想できたとはいえ、何通りもある選択パターンは講座数の増加とクラス編成の硬直化を招くと同時に施設設備に関わる課題も明らかになった。

二階堂高校で数学や理科を深く学ぶには数理コースということで、この教養コースは当初から国語、英語にやや重点を置いた教育課程編成であった。入学後、将来の進路を変更する生徒や自然科学に興味を持ちながらも教養コースに在籍している生徒から「数学や理科をもっと学習したい」という声もあったが、生徒の転コースが教育課程上不可能であるため生徒の要望には応えられないという状況であった。学校長をはじめ関係学年や教科の教員と協議を重ね、教養コースの特色を第一に考え、このコースにおいても第2学年から国際理解や数理コースに近い教育内容が選択できるよう、コース内2類型(型、型)の設定に向けた検討を始めた。しかし、複雑化した教育課程の中にさらに系統だてた編成を試みるという相反することが求められる状況の中で作業は困難を極めた。その都度、関係教科教員との研究を重ねた末、平成19年6月によりやく原案をまとめる事ができた。類型選択の趣旨を生かした科目編成でありながらいくつかの選択科目も取り入れ、また学年間の科目にリレイションを持たせることにより講座数を必要最小限に抑えた。教養コースで入学した生徒も第2学年からコース内での類型選択で外国語あるいは数学、理科に重点をおいた履修が可能となった。このことにより、生徒の学習意欲を活性化させ、進路設計が明確になる教育課程が編成できた。

2 成果及び課題

変化する社会の要請に呼应しながら、学校長の指示のもと学習指導要領を遵守し教務主任として教育課程の改編や調整を繰り返してきた。教育課程については"不易"なものではなく"流行"であると考えている。生徒の学ぶ意欲と確かな進路実現に寄与するため、地域、学校や生徒の実態に則して、本校の教育課程は節目で改編し調整をすることで改善を図り、学校教育目標の具現化に努めてきた。

教育課程は教育計画、授業、評価等を含めた学習活動全般すなわち『カリキュラム』の重要な役割を担っている。教育目標の実現化に向け、総体としてのカリキュラムについて学校内外のいろいろな「資源」を生かし、本校独自の創意と工夫をどう教育課程に反映させ編成していくのか。また学校教育の質を高めるため、「例年どおり」ではなく Plan(計画)、Do(実施)、Check(評価)、Action(改善)を継続的にサイクルとして実施することにより改善を図る経営手法、すなわちカリキュラムマネジメントを取り入れ、推し進めていくことが今後の課題であると考えている。

1 実践内容

本校は、県立高校再編計画の中でも「好きな分野・得意な分野を伸ばす高校」として、“スポーツをとおしての人づくり”を教育方針とし、運動部活動に重点を置くとともに、アスリートとして基礎となる高い運動能力を養成し、専門種目の競技力向上を目指す生涯スポーツ科を併設する普通科高校である。



生涯スポーツ科では、体験を重視した「野外実習」(キャンプ実習、スキー実習、マリン実習、ゴルフ実習、救急救命法・AED実習、身障者スポーツ体験等)や基礎運動能力向上のための「体づくり運動」、種目別専門運動能力向上のための「スポーツ・」の他、専門的な知識習得のための「体育理論」や「生涯スポーツマネジメント」など25単位の専門授業を展開している。

普通科においても、多彩な選択授業を展開しさまざまな進路にも対応する文コース、英・国・地歴を中心に力を伸ばし主に文系大学進学を目指す文コース、理科・数学の力を伸ばし理系や看護・医療系のコースへの進路を目指す健康・科学コースの3つのコースを開設し、生徒の多様なニーズと関心に対応することが出来るようにしている。特に、文コースでは、2系統8教科11講座にわたる選択授業や、「総合的な学習の時間」のチャレンジタイムでの14講座選択制を行い、生徒自らが興味・関心や進路に応じた学習を主体的に行う事が出来る体制を構築している。

しかし、生徒の現状を分析してみると、自らが“得意とする運動”に関しては積極的に取り組み、高いレベルを目指す生徒が多い反面、“苦手意識の強い学習”に関しては消極的な面があり、取り組み度の低い生徒も多く見受けられる。こうした“苦手意識”の克服は、学習面のみならず、運動面における上達にも深く関係し、如何にして『生徒自らが“苦手”分野に立ち向かう』姿勢を身につけさせることが出来るかが本校における指導の最大のポイントであると考えます。

では、生徒はどのような理由から、“苦手”と感じるのであるだろうか？

生徒が“苦手意識”をもつのは、「できない」からであり、「わからない」と感じるからである。確かに、できなければ面白くないし、わからなければ興味もわいてこない。この「できない」や「わからない」が、『できる』や『わかる』になれば、“苦手”は“苦手”ではなくなる。要するに「できない」ことが『できる』ようになる、「わからない」ことが『わかる』ようになることが、学習の目標であり、練習の目標であることを生徒に理解させ、体験させることが重要なのである。

そのための取組として、

- (1) “『できる』・『わかる』を実感させたいうえで定期考査に臨ませる”ことを目標に、机間巡視や確認テストなどで学習の進捗状況が思わしくない生徒に声をかけ、“定期考査で点をとる”ことをとおして学習の効果を実感させる学力補充講座の開設。
- (2) 考査結果の思わしくなかった生徒を対象に、定期考査範囲の学習内容をもう一度解説し直し、“『できる』・『わかる』”を実感させたいうえで、次回の考査に臨ませる不振

者講習の開設。

(3)学力補充講座や不振者講習の取組状況を保護者に報告するとともに、学校と保護者が連携して、課題提出などの指導を行っている。加えて、今年度からは生徒自らが主体的に学習計画を立て、日々の授業に取り組むことができるように、『学校基本フォーム』に基づいた「シラバス」を全授業で作成し、公開している。



シラバス

年度当初に一年間の授業の流れ（学習計画や考査計画）や授業の目標（学習目標、評価規準や評価の方法等）を生徒や保護者に示すことによって、前向きな姿勢で授業を受けさせ、計画的に家庭学習に取り組むことができる環境を構築した。

シラバスの作成は、私案のシラバスを教務部全員で熟慮検討し、規準ラインを作成した後、教務部の各教員がそれぞれの教科で作成、それをまた教務部全員で練りあわせ、各教科に見本シラバスとして示した。

『学校基本フォーム』の構成は、

学習目標：“授業を受けることによって、どのような事ができるようになるか”を明示。

学習方法：授業の進め方や生徒が主体的かつ意欲的に取り組むことができる学習方法のアドバイスについて書いてある。

学習計画：使用する教科書の単元をベースに、どのような内容をどの時期に学習するのが生徒や保護者の立場にたって、わかりやすく書いてある。

また、学習活動における評価の方法について連動した形で書いてある。

学習評価：各授業における評価規準。評価方法については、科目の特性を考慮し、生徒が努力することによって目に見えて変化し、実感としてわかりやすいものを選定。

留意点：授業担当者から、授業を進めるにあたっての抱負や生徒への応援メッセージ。

2 成果及び課題

補充講座の意義や出席状況を家庭に報告することにより、学校 - 家庭が連携した指導を行うことができ、出席状況や取り組む姿勢にも反映されてきている。また、「シラバス」の作成をとおして授業計画もより具体的に立案され、学習進捗度の確認や教科内での情報交換も活発に行われてきている。しかし、生徒の具体的な活用状況を総括してみると、“授業説明書・授業攻略本”である「シラバス」も、その役割が十分に浸透しておらず、授業内での活用頻度も低いため、“単なる配布物”となってしまう感がある。次年度に向け、「シラバス活用の手引き書」を作成するとともに、積極的にシラバス活用を目指した授業展開についての研修も行っていきたい。一方、多彩な選択授業やチャレンジタイムの選択制を展開している結果、教員の負担増となっている。生徒の多様なニーズに応え、自ら主体的に学ぶ姿勢を育てるためにも選択授業や少人数制講座の開講はぜひとも必要であり、『できる』・『わかる』ことを目標とした授業展開のためにも、外部との連携を推し進めていく必要があると考える。

1 実践内容

近年、工業高校を卒業する生徒の進路保障を考える上で、在学中により多くの資格を取得できるよう、その指導方法について多くの研究会や部会等で検討されてきた。2004年度から国家資格である技能検定試験の受検資格要件が大幅に緩和されたことを受け、本校においても、「技能検定機械加工普通旋盤作業3級」の取得に向けて積極的な取組を開始した。



その結果、本校から奈良県内では初となる高等学校在学中での「技能検定3級」合格者を誕生させることができた。

しかし、練習時間の確保や生徒への意識付けを定着することができず、継続して合格者を輩出することが困難な状況にあった。

より多くの生徒がこの資格取得に取り組むための意識付けや、指導体制等を強化するため、講師の派遣依頼や試験会場に当たる「ポリテクセンター奈良」での練習場所の確保にも積極的に取り組んだ。

2005年度からは、試験会場での練習も行うことができるようになり、高度熟練技能者の方に技術指導を依頼し、生徒のみならず、教員に対する助言もしていただき、実技試験合格者を出すことができた。

2006年度は、前年度に実技試験に合格していた生徒も学科を無事合格し、新たに受検した2年生も合格することができた。さらに、2007年の1月には、同じく国家資格である、機械検査作業3級にも挑戦し、合格者を出すことができた。

今年度は、奈良県内の高校生で初めて、機械加工2級に挑戦したが、残念ながら実技試験においてあと一歩のところまで合格点にとどかず涙をのんだ。しかし、3級合格者を多く出すことができ、2級も学科試験には合格しているので、生徒への意識付けもできつつあるように思う。2008年1月には高校生として奈良県初の機械検査作業2級合格を目差して練習しているところである。

2 成果及び課題

(1) 成果

技能検定 機械加工 普通旋盤作業 3 級

2003年度 合格者 1 名(3 年... 1 名)

2005年度 合格者 0 名 (* 実技合格者 3 年... 3 名、2 年... 1 名)

2006年度 合格者 3 名(3 年... 1 名、2 年... 2 名)

2007年度 合格者 5 名(3 年... 1 名、2 年... 4 名)



技能士バッジ

技能検定 機械加工 普通旋盤作業 2 級

2007年度 合格者 0 名 (* 学科合格者 3 年... 2 名)

技能検定 機械検査 機械検査作業 3 級

2006年度 合格者 5 名(2 年... 3 名、1 年... 2 名) (* 学科合格者 1 年... 1 名)

2007年度 受検者 9 名(3 年... 1 名、2 年... 4 名、1 年... 4 名)

(* 実技のみ 2 年... 1 名)

技能検定 機械検査 機械検査作業 2 級

2007年度 受検者 3 名(3 年... 1 名、2 年... 2 名)



旋盤実習

(2) 課題

指導者(講師)の待遇

継続した受検生の確保

工具や計測器具の整備

練習場所の確保

練習時間の確保

練習に伴う材料費の調達

高額な受検料自己負担の軽減

今後の技術指導者の確保及び教員のスキルアップ

3 その他参考となる事項

生徒発表

2006年度 産業教育研究論文 「技能検定取得への取組」

2007年度 近畿工業高等学校長協会総会・研究協議(兵庫大会)

「各種技能検定 資格取得への取組み」

1 実践内容

本校は、吉野林業高校と吉野工業高校の歴史と伝統を受け継ぎながらも、新しい校風の創造に邁進し、スペシャリストとして地域社会の発展に貢献できる人間の育成を目的として、地域との連携を密にし、特色ある教育活動を展開している。また、様々な機会を利用して教育活動の広報にも努めている。



土木工学科においては、土木技術者としての基礎的・基本的な知識を習得させ、実験・実習を通して協調性・積極的な態度を養っている。また、社会の一員として何事にも意欲的に取り組み、自己の責務を全うし、幅広く土木技術の発展を図る能力と実践的な態度を育てることを目的としている。これらを達成するため、土木工学科職員一同が、一丸となって取り組んでいる日々の教科指導の一端を示す。

(1) 資格取得講習会

夏期休業中に3年生を対象（土木工学科以外の学科の生徒も対象）として、「小型車両系掘削運搬機械特別教育」「締め固め機械（ローラ）特別教育」「フォークリフト特別教育」「高所作業車特別教育」の4種類の奈良県労働基準局指定による建設機械の運転（操作）資格取得講習会を実施している。本年度は、延べ125名の生徒が資格を取得した。このことによって、参加生徒一人一人が達成感と自信をもち、進路実現にも結びつくものと考えられる。また、昨年度から門戸を広げ、学校間連携のきっかけとなればと考え、十津川高等学校の生徒も受け入れている。

上記以外にも、「土木施工技術者試験」「危険物取り扱い責任者」「測量士補」「火薬類取り扱い保安責任者」等各種資格試験の受験者に対し補習を実施している。

(2) 生徒研究発表

社団法人土木学会関西支部・近畿高校土木会コンクリートカヌー競技大会兼課題研究発表会において、近畿・中国・四国の各地から、大学8艇、一般企業5艇、工業高等専門学校6艇、高等学校23艇の計42艇が参加、本校から参加した2艇の内「さくら」は、総合の部準優勝、高等学校の部優勝、「若あゆ」は、総合の部第4位、高等学校の部準優勝の成績をおさめた。参加した生徒全員が、ものづくりの素晴らしさを体験し、やればできるという自信を深めた。この製作過程を課題研究発表として会場並びに文化祭でプレゼンテーションした。

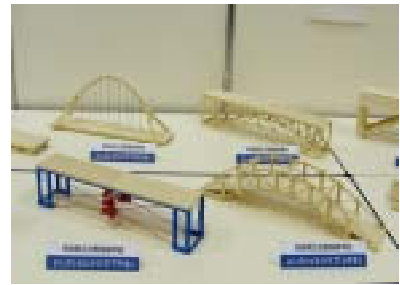


「さくら」

国土交通省近畿地方整備局・近畿各府県・各公団等

建設技術展2007近畿において、橋梁模型製作コンテスト学生部門に出展した。コ

ンテストには大学院ほか、高等専門学校、工業系高等学校から34作品が出展された。支給された材料で製作し、中央に30kgの荷重をかけ1分間耐えることが条件で併せてデザイン、経済性などが審査される。本校「よしのシビルクラブ上千本」が優秀賞、「よしのシビルクラブ中千本」が審査員特別賞を受賞、一昨年及び昨年に続き3年連続受賞した。大学院生や高等専門学校も



橋梁模型

参加する大会において、このような素晴らしい成績をおさめたことは、参加生徒全員の大きな自信につながり、後輩にもこの技術が継承されるものであると確信する。

また、昨年度の実績を受け、今年も学校ブースへ一昨年・昨年と連続受賞した橋梁模型3作品と、ころころtree(キラキラ星・かえるのがっしょう・ちゅうりっぷ)等の作品を展示した。来場者の反響も大きく、作品を製作した生徒全員がものづくりの大切さと大きな感動と感激を得ることができた。

奈良県産業教育フェア

社団法人土木学会関西支部・近畿高校土木会主催のコンクリートカヌー競技大会において、本校から参加した2艇、「さくら」と「若あゆ」を展示した。

国土交通省近畿地方整備局・近畿各府県・各公団等主催の建設技術展2007近畿において、橋梁模型製作コンテスト学生部門に出展した、「よしのシビルクラブ上千本」「よしのシビルクラブ中千本」並びに一昨年・昨年と連続受賞した橋梁模型及びころころtree(キラキラ星・かえるのがっしょう・ちゅうりっぷ・ぶんぶんぶん)等の作品を展示した。

文化祭

コンクリートカヌー競技大会に参加した「さくら」と「若あゆ」及び橋梁模型製作コンテスト学生部門に出展受賞した橋梁模型を展示した。

コンクリートカヌー競技大会に参加した「さくら」と「若あゆ」の製作過程と大会の様子をプレゼンテーションした。

2 成果及び課題

- (1) 教科に関する資格取得にチャレンジすることにより積極性が養われ達成感・満足感が得られた。
- (2) ものづくりを通し、製作時にアイデアが膨らみ、完成時に喜びと達成感が得られた。
- (3) 生徒が何事にも自信をもって取り組むようになった。
- (4) 現在活動している生徒は、課題研究やよしのシビルクラブの一部の生徒だが、将来、土木工学科の生徒全員が、積極的に資格取得やものづくり等に取り組むことのできる体制を整えていきたいと考えている。
- (5) すべての活動において、科全体がまとまり協力できたので、運営はスムーズであった。

3 その他参考となる事項

吉野高等学校ホームページ <http://www.yoshino-h.ed.jp/>

1 実践内容

生徒指導を担当して18年、そして斑鳩高校から現在の法隆寺国際高校に至るまでの5年間、生徒指導部長を任されている。この5年間で特に課題として取り組んできたことは、生徒が安心して学校生活を送り、学校での居場所を確認できるようにすることである。そのためには、毎日、一人でも多くの生徒に声をかけ、そして名前を覚えることが大切だと考えている。



また、学校を家庭に置き換えると生徒は私たち教師にとって子どもであり、時には弟、妹の存在である。従って親として叱咤激励し、また兄や姉として相談に乗り、一緒に悩むことも大切であると思う。さらに、家庭で親が喧嘩ばかりしていると、子どもは心がすさみしだいに家から遠ざかっていくので、生徒が温かみを感じながら安心して学校生活を送るには、教師同士が「和」をもって生徒を包み込むことこそが最も大切であると考える。

< 具体的取組 >

(1) 基本的な生活態度の確立

本校では、毎月はじめに朝のホームルームの時間を利用して、各学年ごとに頭髪・服装を点検する生活マナー指導を行っている。3年生が格技場で、1・2年生は体育館を使用して生徒一人一人に対して各学年の生徒指導部員を中心に全教員で指導している。以前は各教室で担任・副担任が点検し、指導を必要とする生徒に対しては生徒指導部が指導していたが、各クラスで指導が曖昧になり生徒・保護者から不満の声があがったため、各学年の全教員で生徒一人一人を指導することとした。これにより、全教員が共通の基準を持ち、今まで以上に真剣に取り組んでいるという姿勢が生徒に浸透するとともに教員間での情報交換が密になり、指導件数が減少すると同時に指導時間も短縮するという成果があがった。今後も指導を要する生徒に対して、ただ頭ごなしに叱るのではなく（時には必要だが）、一人一人の生徒に多くの教員がかかわることによって生徒に納得させる指導をしていきたい。

(2) 交通安全教育

本校では、単車について登下校の手段としての使用や制服での乗車は禁止しているが、保護者の責任・監督のもと単車の免許取得や使用を認めている。なぜなら、以前は単車にかかわる特別指導が多く、保護者からも認めてほしいという要望があがったことや、違反をしているという後ろめたい気持ちで乗ることが事故や交通法規の違反につながるのではと考えたからである。

しかし、ただ保護者の責任のもとで乗車を認めているのではなく、命を大切にするという観点から生徒に社会の一員としての自覚を植え付け、危険性を認知させる必要があると考え、近隣の法隆寺自動車教習所や西和警察署及び県警交通機動隊の協力を得て、毎年1学期に2年生を対象に交通安全教室を開催している。その結果、

単車に係る特別指導はほとんどなくなり、また命にかかわるような事故も起こっていない。

(3) 登下校指導

登下校指導は毎日輪番制で行っている。自転車通学の生徒が非常に多く、特に登校時は通勤途上の自動車の往来が激しく大変危険である。教員の配置は毎日10人体制でJR法隆寺駅や近隣の住宅街、本校近くの交差点を中心に行っている。近隣からの苦情はあるが、登下校指導に出ている教員に対し近隣の方々が生徒の通学状況の情報を提供してくれることがしばしばあり、校外での生徒の様子を知るうえで非常に役立っている。また、生徒の登下校時の服装や友人関係（例えば、いつも複数で登校しているのに最近一人で登校している）などを知るうえで大切な取組と考えている。

(4) 携帯電話の指導

携帯電話については、高校生のほとんどが利用していることや、昨今の社会情勢では、生徒を取り巻く環境が変化して、登下校においても危険にさらされる恐れがあるため、そのような場合に自分自身を守るために必要な物だと考え、校内への持ち込みを許可している。しかし、校内での使用はもちろん、生徒が手に持っていた場合でも放課後まで預かることにしている。

今後の課題としては、メールによる他人への誹謗や中傷という問題やメールの利用による対話力の不足も指摘されていることから、携帯電話やインターネットなどの利便性を踏まえながら、トラブルに巻き込まれないように、使用のマナー等についても指導していく必要があると考える。

(5) 生徒指導とクラブ活動

本校の生徒指導はクラブ活動の充実を抜きには成り立たない。なぜなら本校が落ち着いてきた時期とクラブ活動が活性化してきた時期が一致しているからである。これはクラスのなかに目標をもったクラブ員が多数いるため、他の生徒に大変良い刺激を与えているのではないかと考える。今後もさらなるクラブ活動の発展、充実に生徒会指導部や健康体育部等と連携を密にしながら取り組んでいくことが大切である。

2 成果及び課題

本校は、歴史文化科・国際英語科・国際教養科・普通科と4学科で1学年8クラス規模である。それゆえ、生徒のニーズも多様であり、各科ごとに生徒の個性も多様である。また国際科が3クラスあるため女子生徒の割合が多くなっている。今後は女子生徒に対する指導にも重点を置きながら、近年、生徒指導上の課題となっている特別支援教育の取組や校外での生徒の補導について、関係機関との連携を密にし、より新しい情報を取り入れ、早期に適切な対応をしていくことが重要だと考えている。

最後に、今後も不易と流行の部分を認識しながら、生徒が本校に入学してよかったと思えるような温かみのある生徒指導を心がけ、卒業後も自信をもって本校の卒業生と名乗れるような地域に愛される学校にしていくように生徒とともに努力していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立法隆寺国際高等学校ホームページ <http://www.horyuji-h.ed.jp>

1 実践内容

児童・生徒の規範意識の低下が叫ばれて久しい。また基本的な生活習慣が身についておらず、集団生活に不適應を起こす生徒も急増している。毎年本校で実施している「学校生活アンケート」の集約を視座としたここ数年における生徒の学校生活の現況からは、その生徒像として「教員（大人）不信と問題行動の惹起」「人間関係構築の弱さ」「自己肯定・他者否定、自己否定・他者肯定、自己否定・他者否定の生徒群」「自尊感情の喪失」という4つのキーワードが読み取れる。そのような現状において、生徒指導の手法として、教員個人の経験的「勘」に依拠するのではなく、生徒理解の一助として他の手法を採り入れる必要性を常々感じていた。生徒にとっては、今までの自分を深く知り、現在及び未来の自分についても沈思・熟考させる機会を作らせることが可能となる。また教員の側にとっては、生徒の心の様態が把握でき、個々の課題点を整理した上で指導ができ、生徒理解の精度向上が生まれる。既述のような生徒の現状を踏まえ、効果的な生徒指導を展開するために「交流分析」に注目した理由は以上ではあるが、実は今一つの動因として、「机上」の生徒理解ではない、教員・生徒相互の関わりの「活性化」を目指したのも事実である。このようなことは生徒指導の基本中の基本だが、今教育現場はこの原点に戻ることを強く意識しなければならない客観的状況にあると理解している。



集団心理療法である交流分析のアセスメント手法「エゴグラム」は、自分の「心」の状態に気づくためのアセスメントである。個々の指導場面において、生徒の同意の上で、心の状態を構成する五つの要素（CP・NP・A・FC・AC）を診断する質問が各20問入った計100問のエゴグラムテストを実施する。自分のデータから、図表も生徒に完成させる。テストの結果を生徒の面談時にフィードバックすることを告げる。担任が認識している日頃の生徒個人の様態と、図表サンプルを参考に分析した生徒個人の図表を材料に、面談におけるアドバイスや適切なストローク（働きかけ）の内容を吟味し、結果用紙にまとめ、結果内容を共有し、指導の際の資料として活用する。

右図1は、成績も良く、生活面においても他生徒の模範となるA子のエゴグラムである。その頃体調不良を訴え、欠席遅刻は決してしないが、最近保健室に来室することが度重なっていた。一見グラフからは、いずれの自我状態においても心的エネルギーが大変高く、高次元において安定している図表のように見える。しかしながら、このエゴグラムは、彼女のFC（奔放さ）とAC（いい子）がいずれも高いエネルギーを保ちながら、激しくぶつかっていることを示唆し



図1

ている。両者の心理的葛藤が激しいため、欲求不満が溜まりやすく、気分的にいらつき、情緒不安定の傾向が強い。次ページ図2は、類似パターンの波形が多いエゴグラム

である。理屈ではない直感力の鋭さがこのパターンの特徴で、物事の本質を見抜くのに長けている。しかし何事も自分の好き嫌いと快・不快の感情で決めつけてしまう傾向が最大の欠点であり、しかも軽率で我慢強くない面を有するので、問題行動を起こす生徒も多い。

2 成果及び課題

パーソナリティーの核となる「性格」は成育歴や遺伝で形作られ、それが心に内包されたものであるのに対し、交流分析でいう「態度」は改善によって良い方向に変える事ができ、それはエネルギーとなりえる。つまり自分の「態度」を適切な方向へ変えていくことによって、生き方や人間関係は大きく変わりうる。

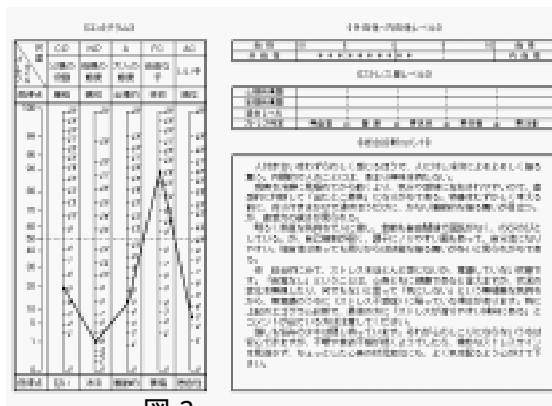


図 2

「現在の自分はどのような『態度』をとっているのか。」「様々ある自分の態度のなかで、ではどのような態度をどのように変えていくのが最も良いのか。」そのような問題を指導者の側がよく分析し、生徒にどのように指導していけばいいのかが重要なポイントとなることはいうまでもない。

教員の側からは、面談において学年当初の初面談であるにもかかわらず、かなりその内容が豊富なものとなり、生徒との人間関係の構築に役だった、との声がある。また集団の人間関係に悩む生徒達に対して、適切なアドバイスを与える資料として有効だった、生徒を多面的に見ることができ、勘に頼った一面的な理解を反省させられた、との声もあった。

実践で明らかになり、われわれ教員も学習したことは、主に次の点である。まず、生徒が様々な場面で様々な失態を犯しているとは自他共に理解していることは、多くの場合誤っており、実際はただ一つのパターンの繰り返しによる失態であるということ。次にエゴグラムの波形が全体的に低く、心理的エネルギーの放出に乏しい生徒がここ数年増加傾向にあること。また自分自身の感情を自然に出し切れず、ストレスを抱く生徒や、直感的に判断して行動し、後は成り行きまかせに事を收拾する性質の生徒も多数存在すること等である。ストレスが高じた場合はリストカット、飲酒、暴力等の非行に発展する生徒も存在する。資料を生かしながら、生徒個々に応じた指導をいかに継続的に構築していくかについては、さらに熟考しなければならない。エゴグラムテストの診断は、一般に「交流分析士」という資格がある専門家が行う。市販のテストはすべてこのような専門家が関わったものである。教員が診断分析に関わることはそれ自体無理があり、誤った診断の可能性もある。しかし誤謬を恐れず、あえてそれを手作業で行うのは、既述した教員側・生徒側双方における効果のためである。

我々が培ってきた生徒指導に関する経験が、熱意ある生徒への関わりと客観的なデータを伴い、生徒の指導に対する更なる意欲を生み出せるとすれば、これからの生徒指導を推進する上でその一助になると考える。

3 その他参考となる事項

- 日本交流分析学会 <http://www.js-ta.jp/index.html>
- 日本交流分析協会 <http://www.j-taa.org/>

1 実践内容

「日々作っては消えていく教材を何とかして形に残したい」、教材市場「にかいどう」は、そんな思いから始まった研修会である。「小学校、中学校及び特別支援学校の指導場面で使っている教材を紹介し合うことによって児童生徒にどのような力をつけていかなければならないのかを考える機会とし、互



いの実践力を高める」ことをねらいとしたこの研修会は、今年で第4回目の開催(8月28日)となり、特別支援学校のセンター的役割を担うべく、本校全教師が総力を挙げて取り組んでいるものである。

参加の呼びかけは、県内の特別支援学校(盲・ろう、養護学校)、校区内の小・中学校に案内を配布し、参加者を募り、昨年度は、特別支援学級の担任教師を中心に、約200名の参加者があった。

教材市場の計画及び立案については研究部を中心として、関係各分掌に加えて実行委員会を立ち上げて行っている。案内の作成から始まり、展示教材の整理・分類、体験コーナーの候補選び、他校との連絡調整等、当日を迎えるための役割をそれぞれ担っている。当日の運営については本校教師が全員体制で行うことになる。

教材市場は、次に掲げる「教材展示コーナー」と「実践・体験コーナー」の2つを大きな柱として、午前中は校内の教師向け、午後は校外からの参加者向けに実施する。

(1) 教材展示コーナー

教材展示コーナーでは、教室をブースに見立て見本市会場のようなイメージで教科・領域ごと(例:ことば・かず、音楽、美術、体育、しごとなど)に教材を展示する。教材の一つ一つには、どのようなねらいで、どのような実態の生徒に、どのように提示するのかを記述した説明書を添付し、同じ教材でも、生徒の実態に合わせて使い方を工夫すれば、幅広く応用することができ、新しい発想のヒントを得ることも可能となっている。

平成16年度の第1回目は本校の教師の自作教材のみの展示であったが、第2回目からは県内の他の養護学校にも教材展示を呼びかけ、今年度については盲学校等からも展示があった。

(2) 実践・体験コーナー

実践・体験コーナーでは、実際にものづくりや教材づくり（実践・授業）を体験する。午前、午後に行ったそれぞれの研修を生かして、体験コーナーの手伝いや受付、教材の案内係を務める。今年度の実践・体験コーナーの内容は「進路、お話教材、朝の会、体育、音楽教材、紙漉き、木工、サンドブラスト、靴下の輪による手芸品作り」であった。

さらに、午後の部では、平行して地域の教師・支援者を対象とした教育相談を行い、地域の学校の指導場面の中で困っていることや日頃の悩みなどを気軽に相談できる機会を提供している。

また、午後の部開始に先立ってオープニングセレモニーを行い、今年度は地域の特別支援学級で活躍する先生をゲストに招いての寸劇と本校有志によるフラダンスで盛り上がった。

2 成果及び課題

(1) 成果

毎年開催する中で、地域の小中学校において教材市場の認知度が高まり、2回目、3回目と引き続いて参加される人も多くなり、教材づくりに工夫を凝らす気運が高まってきている手応えを感じている。



また、参加者対象のアンケートを通じて、本校の教材市場が特別支援学校のセンター的役割を担う上でどのようなニーズがあるのかの情報が蓄積され、今後の教材市場の方向付けに関わって、貴重な財産となっている。さらに教材市場を運営する本校教員にとっても教材や実践を展示・実践することで自身の実践力を高める契機となっている。

(2) 課題

今年度で4回目を迎え、教材市場の方向性（内容、対象者等）について検討する時期にきているのではないかと考えている。そのためには、参加者のニーズをつかみ、そのニーズに一層応えていくとともに、本校からの発信だけでなく、特別支援教育に関わる人達の情報交換の場として教材市場をどのように練り上げていくかが大きな課題となっているものと考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立二階堂養護学校ホームページ

(<http://www.pref-nara.ed.jp/nikaido-ss/>)

1 実践内容

昭和 63 年に赴任した畝傍高校で 12 年間、その後北大和高校に転勤して現在の奈良北高校に至る 8 年間、私が弓道部の顧問として部員を指導するようになって 20 年が経過した。若いころ 2 年ほど弓を引いたことがあるものの、全くの素人であった私が、弓道部監督として全国大会の舞台に臨むなど貴重な経験に恵まれたことは、高体連弓道部の先生方や奈弓連の先生方のお陰と深く感謝している。



さて、本県は弓道部保有校が少ない割には、総部員数は 800 人を超える大所帯で、近畿でも最大規模の部員数を擁している。つまり、1 校で多数の部員を抱えているわけであるが、その割には道場は狭く一人当たり十分な練習量が確保できないというのが、県内の多くの弓道部の悩みとなっている。前任校の畝傍高校でも例年 30 名を越える新入部員を迎えるのが常であった。ところが丁度この時期はインターハイ県予選を間近に控えているために、上級生の練習が優先し後輩の指導は二の次になるのが実状である。弓を見たこともない初心者が基本的技術を習得し、弓道の奥深さを知り、全国大会に出場するような選手にまで成長するためには高校 3 年間はあまりにも短い。

そこで新入部員の 4 月・5 月の指導法が重要となるわけであるが、この時期畝傍高校では、上級生は選手としての練習に集中させ、新入部員の指導は主に私が受け持つことが多かった。こうして一人で多人数の生徒を前にして指導する経験の中から徐々に効率的な練習システムが形成されていった。私はこの畝傍式練習システムを現在の北大和・奈良北高校に持ち込んで指導しているが、ここ数年公務が多忙になり、新入生の指導に十分な時間を割けないことを痛感し、3 年前新入生の指導



▲ 新入部員の指導風景

マニュアル『日々の鍛錬』を作ることにした。以下にこのマニュアルについて、さらに競技力向上の鍵をにぎる重要な弓具である磔についての概要を述べる。

(1) マニュアルによる新入部員の指導

多数ある弓道の入門書や手引き書は弓道の個々の技術について詳述してはいるものの、実際高校生が弓道部に入部し毎日どのような練習過程を経て上達していくかを、段階を追って解説しているものは皆無である。出来上がったマニュアルは 30 ページに満たない小冊子であるが、図や写真（モデルは先輩の弓道部員）を多用し、入部したばかりの部員が、早い段階から弓道部に対する正しいイメージを持ち、部での毎日の生活と具体的練習過程を容易に概観できるよう意図して製作した。練習過程は種々の段階に分割されていて、同じ進度の者が属する各段階ごとのグループを小人数の上級

生がまとめて指導する仕組みである。各段階の練習内容は明確に定められているので、上級生は各自の練習の合間に交代で後輩を指導することが可能となる。裏表紙には各練習段階が流れ図（進度表）で示されており、新入生は毎日の練習の終わりに、この進度表の該当の段階に上級生からその日の日付を書き込んでもらう。一般に弓道の基礎練習は単調になりがちであり、初心者は早くの前で矢を放つ日が待ち遠しいものであるが、この進度表により各自の上達の度合いが視覚化され、新入部員は目標をもって毎日の練習に意欲的に取り組むことができるようになる。

(2) 弓具、特に磔（ゆがけ）について

グラスファイバー製の弓、アルミ合金製の矢の出現により、弓矢は均質で扱いも容易になったが、磔（右手に着ける鹿皮製の手袋状の弓具）については、様々な新素材が出現した今も旧来のものと変わらないどころか、むしろ品質は低下しているのが現状である。弓と矢は別の物に変えても3日もすれば慣れるが、慣れ親しんだ磔は体の一部といってよく、別の磔では中らないばかりか射型等様々な面で弊害



▲ 日々の鍛錬と北高磔

が出ることもある。私は10数年前から自分でも磔を製作し、高校生が使用する競技用磔について試行錯誤を続けるなかで、弓道の技術や部員の指導法について、主に磔の構造と使用法という側面から考えてきた。ところが昨年、尾州竹林派に伝わる節抜きの磔を試射する機会を得て、弱弓を引く高校生には最適の磔であることを確信した。そこで、この竹林磔を私なりに改良して「北高磔」と名付け生徒に使用させると概ね好評であった。本年のインターハイ出場メンバーもほとんど北高磔を使用し、的中の伸長をみた。

2 成果及び課題

奈良北高校一期生から私のマニュアルで育ったが、なかでも女子チームは大きく成長し、1年生の秋に先輩を追い越して選手となり、平成17年度全国選抜大会県予選で2位に入賞、近畿選抜大会（大阪）で3位入賞した。2年生時の平成18年度はインターハイ予選こそ3位に終わった（個人戦は2位で全国大会に出場）ものの、以後の県内公式戦（近畿大会予選、県総体、全国選抜大会予選）の全てに優勝し、6年ぶりに全国選抜大会（水戸市）に団体出場することができた。今年度3年生時、遂にインターハイ予選で優勝（男子個人戦も2位で全国進出）し全国大会（唐津市）出場を果たした。本年でマニュアル使用も3年目となり、上級生にその内容が十分浸透したと思われたので、新入生の指導の初期段階では私はなるべくノータッチで遠目に観察するに止めた。その結果、上級生は昨年以上に自信を持って1年生を指導しており、この形態が本校弓道部の伝統として定着することが実感できた。特筆すべきは、インターハイに出場する3年生が熱心に練習の合間を縫って1年生を指導する姿が見られ、このことにより部全体の間関係にまとまりができ、また下級生の指導が3年生の選手自身の練習にも好影響を与えている。また、磔の製造については、夜なべ仕事になることが多く、新入部員全員のものを制作するのは、時間と労力を要する仕事であるが、最近皮革用ミシンの使用により能率が向上している。

1 実践内容

私は、昭和57年4月、教員2年目に高田東高校に赴任し、生徒指導部に所属した。生徒急増期の高田東高校は、家庭的・経済的に極めて厳しい生徒が多く、クラス数の増加に比例して問題事象が頻発した。毎日行われる特別指導の申し渡しの中で、学校のルールと世間の常識を子どもと保護者に理解させるため、徹底的に話し合い、必ず納得させた上で特別指導を行った。時には深夜にまでもおよぶ家庭訪問、突然の警察署における生徒の引取など、生徒を守り育てるために教育活動に没頭する日々が続いた。その結果徐々に生徒も落ち着きを見せ、問題事象や特別指導が減少した。学校が落ち着くにつれ、クラブ活動も活発になり、サッカー部の指導は8年間継続して行った。大会では毎回初戦突破できるようになり、新人戦ではベスト8、県総体ではベスト4の結果を残せるまでになった。



平成2年からの勤務校である富雄高校では11年間サッカー部の監督として日々の練習、対外練習試合、公式戦に全力で取り組んだ。部員には県の選抜選手などの際立った選手はいなかったが、毎年県大会ベスト4に顔を出すチームになった。地元少年チームの要請もあって、毎週月曜日には地元の小学生を集めてサッカークリニックを開催し、将来サッカーの指導者を希望する部員にはコーチとして子どもの指導に当たさせた。教えることにより、部員のサッカー技術は向上し、奈良県のみならず他府県の小学生チームを招待して、部員の運営・審判のもと、「富雄高校カップ」を主催するまでになった。これは奈良県における「次代の選手育成と異校種間交流」の先駆けともなり、この大会に出場することを励みとする少年チームも出てきた。

当時富雄高校は、奈良県に2校しかない帰国生徒の受入校で、中国残留孤児の子どもが毎年数名入学してきた。中国語の読み書きが出来ない帰国生徒もいて、慣れない日本の生活と学校における取り出し授業に大きなストレスを感じていた。私は学年主任として、この現状を学年の生徒にも訴え、取り出し授業を減らし、その代わりに授業内容をクラスの生徒が帰国生徒に教える形式を採用し、学年やクラスで帰国生徒を支え、学習やなかまづくりで効果を上げることができた。



公式戦(提供 奈良新聞社)

平成13年に桜井高校に赴任し、サッカー部監督と学校行事をほぼすべて担当する特別活動指導部長を任され、生徒が自ら企画・立案・運営する生徒会・委員会活動をめざして、生徒会本部役員の育成を図った。いかにして桜井高校の伝統を受け継ぎ発展させていくか、リーダーとは単に人の上に立つのではなく、「まず自らが率先して考え、行動

し、人を動かすこと」の必要性や「考えや思いをなかまが理解できるように伝えること」の大切さを教えるため、グループディスカッションを通して、グループで意見をまとめ、的確に伝えるトレーニングを行った。学校行事については、それまでは担任がクラスの生徒に連絡・指導していたが、特別活動指導部でクラスの担当委員を集め、各行事のねらいや実施の手順を伝え、担当委員がクラスで連絡し、また意見を集約するという手法を取った。そして、新入生クラブ紹介・球技大会・文化祭・文化鑑賞会・カルタ大会・予餞会などの行事を、生徒に企画・運営させ、さらに行事の充実も図り、昭和58年から続いている清掃ボランティア活動では、生徒会を中心に担当委員がクラスで積極的に呼びかけ、以前は3割程度であった参加者が、平成19年にはほぼ全校生徒が参加するまでになった。

本校は平成16年に創立百周年を迎えたが、その際に生徒から希望が出て「華櫻会」と名付けた創立百周年生徒実行委員会を組織し、生徒達は主体的に校内や通学路の美化活動に取り組むとともに、記念行事や式典の運営にも積極的に関わっていった。



清掃ボランティア

2 成果及び課題

私は現在、第3学年主任として今までの指導を基盤に、学力の伸長と生徒指導に力点を置いて教育活動に取り組んでる。これまで担任レベルで指導していた学力不振生徒を「勉強クラブ」という名称の下、定期考査ごとに学年で集め、集中力が欠如している生徒や学習から目を背けている生徒を指導している。また、遅刻を減らすために遅刻の多い生徒を学年全体として集め、基本的な生活習慣を身につけさせる指導を行い、前年に比べて大幅に遅刻を減少させることもできた。今後は、担任・副担任ともさらに連携を深め、きめ細かな指導を通して、生徒が自ら学び、自ら考え判断し、自ら行動し、それぞれの進路希望を実現して、全員が本校で学んだことに誇りを持って卒業していけるように努めたいと考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立桜井高等学校ホームページ <http://www.sakurai-hs.ed.jp>

1 実践内容

学習指導要領に「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。(以下略)」と謳われているように、開かれた学校づくりが大切になってきている。また、奈良県教育委員会の学校教育の指導方針のなかにも、重点課題として、「家庭・地域との連携・協力」が挙げられ、家庭や地域の理解を得るための情報を積極的に発信することが指摘されている。



私自身、本校の渉外的な校務分掌を担っている総務部の業務にあたり、開かれた学校づくりと積極的な情報発信に、どう関われるかを常に強く意識して実践してきた。

校長の指導のもと、学校全体で「開かれた学校づくり」を推進しているのであるが、私としては主に次のような点に関して取り組んでいる。

(1) マスコミへの情報提供

学校の様子や生徒の活躍ぶりを、広く地域の方々にお知りいただくうえで、新聞・テレビ等メディアのもつ力は非常に大きい。そのためできる限りマスメディアへの情報提供を心掛けた。本校は活気があり、生徒が本当に頑張っている学校なので、情報提供に値する話題も多く、1年間に10～15本程度の情報提供を継続している。

平成17年度には県立学校情報発信グランプリ報道提供部門最優秀賞をいただき、平成18年度も11件の情報提供のうち7件をマスコミに取上げていただいた。平成19年度では、「台湾の工業高校との交流会」「課題研究匠塾」「国産初ジェット機展示記念式典」等の情報を提供している。

(2) 育友会(P T A)

普段から育友会本部役員や育友会会員との連絡を密にすることに加えて、学校の教育方針を理解していただくため、「王工教育の日」や「課題研究発表会」の企画に企画し、保護者への広報に力を入れることで、延べ100人程度の保護者が授業参観等に訪れた。

また、育友会広報誌編集にも積極的にに関わり、学校の様子・生徒の活躍ぶりを伝え生徒への教育支援に理解を求めてきた。

(3) 学校評議員

本校学校評議員事務局長を担当し、学校の様子や教育方針を伝えるため、定期的に情報を提供した。また学校評議員から寄せられた意見を外部評価のひとつとして、校内学校評価委員会の資料として集約し、教職員への伝達に努めた。

(4) 中学校との連携

中学校との連携に努め、中学生やその保護者及び中学校の先生方へ、本校の様子や生徒の様子・進路状況等の情報提供に努め、中学生の進路選定の参考になるように、また、本校生の活躍が広く伝わるように、積極的に情報発信を心掛けた。

具体的には、中学校で実施される進路説明会には進んで出席して本校の様子や生徒

の活躍ぶりを説明する一方、学校見学の要請にはできる限り、中学生の都合に合わせ、休業日の見学希望にも応じた。平成 18 年度では、中学校への説明会参加は 6 回、中学校からの来校は 11 回であった。

さらに、本校で行うオープンキャンパス「王工見学会」では企画・立案・運営の中心となり、中学生やその保護者及び中学校の先生方にお越しいただき、本校の特色や本校生の生の姿をご覧いただき、進路選択の参考になるように配慮する一方、本校生には、後輩の中学生に堂々と今の姿をお見せできるよう指導してきた。



王工見学会

(5) 本校生へのフィードバック

家庭や中学校及び地域社会へ情報発信を行う一方、本校生へのフィードバックにも留意した。外部から本校へ注がれている目を生徒に意識させるため、全校集会や式典の指導等の機会を利用して、中学校や保護者また地域社会からの反応を伝え、生徒の責任ある態度の育成や向上心の高揚に努めた。

2 成果及び課題

「最近王工生は頑張っていますね。」などと声をかけていただくことがよくあるが、嬉しい限りである。私たちの取組が、中学生の進路選択の役に立ったり、地域や社会から本校に関心を寄せていただき、それが、本校生の自覚や向上心につながっているとすれば、これほどやりがいのある仕事はないと思う。

今、学校がどうなっているのか、生徒はどう感じているのか、何を求められているのかを強く意識しながら勤務するようになったことが、大きな成果である。

今後、さらにこれまでの取組を深め、全教職員の協力を得ながらより広めていくことが課題である。

3 その他参考となる事項

本校のインターネット、ホームページのアドレスは <http://www.oji-ths.ed.jp> 様々な本校に関する情報や本校生の活躍ぶりが掲載されている。

